



TITLE:

第1部 第3共和制とオルガスム

AUTHOR(S):

石田, 靖夫

CITATION:

石田, 靖夫. 第1部 第3共和制とオルガスム. 仏文研究 1990, 21: 83-117

ISSUE DATE:

1990-09-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/137763>

RIGHT:

第1部 第3共和制とオルガスム

石 田 靖 夫

われわれの前に一幅の肖像画が残されている。肖像画作者はジャン・カサー、題は「権力について」。1946年のヴァレリー追悼特集号に収められたものである。寄せられた文章の中でもカサーの追悼文は、作家のある二重性を極めて印象深いシルエットとして素描している。それは、ヴァレリーが同時代人からどのように見られていたかを教えてくれるという意味で、われわれにとって貴重であるだけではない。それは、委細を尽くした分析とそれに基づいた理論的展開の形式を確かに持つてはいないが、ヴァレリーを論じようとする者であれば誰しも、常に、まず、思い起こさなくてはならないような作家像にはちがいない。肖像画はこのように始まっている。「私は、ある日、センセーションを呼んだオランジュリ美術館のある展覧会——確か、ルーベンスの展覧会であったと思う——の特別招待日で、群衆の一角にいるヴァレリーに出会った。毛皮付きコートにくるまれて身をかがめ、片眼鏡を浮かべて、彼は、お互いにせき立てあい、押しあいへしあいして、その間を縫うようにして時に、稲妻のように、ある傑作の金色あるいは緋色が垣間見られる、周囲の人たちすべてをじっと見つめていた。しかし、彼らがそこにいたのは他でもない、そこに居合わせるためであって、どんな絵でもよい、それを見るためではなく、その場に居合わせて息がつまりそうになるくらい混雑することの快楽のために、貴重な＝気取った précieuse 招待状をひけらかしていたのだった。端々に南仏なまりの聞きとれる、鼻にかかった、まくし立てるような口調で、ヴァレリーは私に言った。『特権者たち！』と題して[ジャン・]フォラン Forain[ドレフュス事件の過程で反ドレフュス派として《Pss't》と題する政治諷刺漫画紙を発刊した画家¹⁾]がカリカチュアを描くところを想像してもよさそうだ。」そして、毛皮コートにすっぽりくるまれた奥から、彼は驚くべき見せ物＝光景 spectacle をじっと眺め、それを餌にして好奇心をみたしていた。ようやくのこと、頭を横に振りながら、彼はつぶやいた、『おかしな人たちだね、この人たちは』（C'est drôle, les gens.）。彼はしばらく、この人たち、彼らの同類＝係争点 espèce、彼らの儀式とは無縁の者となって、波間からおどり出た魚が海岸で水浴びしている人や踊っている人を眺めでもするかのように、彼らを眺めていた。しかしながら、その彼にしても、やはり、招待状を手にしてこの儀式に供物を捧げに来て、喜劇の仲間入りをしていたのである。この喜劇こそ彼を生かしていたのであり、彼はそのことをよく承知していた。従って、彼が、あの、メランコリーに満ちて深みのある痛烈な皮肉を言って微笑を浮かべていたのは自分自身に対してでもある。ともかくも、われわれは自分の方から人々に与えるものでこそ生きているものだ、つまり、それ

によって生きる糧を得ているものなのだ。苦い取引 commerce。だが、勤務時間とか、行きつけの店の主人の廊下を走り回ることとかを越えて、あれほど鮮烈な意識を持ったこの人間は、夜が白みはじめるころに、日々、ある一時^{ひととき}を設定していたのであって、彼はその一時を一生守り通し、自分の存在と権力＝権能 pouvoir のためにだけ取っておいたのである。彼は、そこで、なるほど魅惑 charmes と訓練 exercices にだけ基づいていたとはいえ、しかし、絶対的な支配者 maître として君臨していた。純粹で、あっという間の一時。それが過ぎると、市場 marché が再開するのだった。彼はテスト[氏]とレオナルドが虚構、小説、本当らしくない仮説であると自らに告白するのに十分なくらい、権力＝権能の諸特性と本質を瞑想していた²⁾。」

美術館内の、たとえ名士連という極く限られた特権者の群衆にもせよ、そこに立ち交じっているヴァレリーと、伝説的に有名な、夜明け近くに起床し、《純粹で深い時刻》を、《ランプと太陽の間で》、《ある他者、すなわち、読者についての観念がこれらの瞬間には全く不在である³⁾》と断言される中で、コーヒーをすすりタバコをくゆらせながらカイエを執筆しているヴァレリーとがスケッチされているわけだ。この夜明けとともに始まる一時は、清浄な光に浸されて利害＝関心の赴くままペンを走らせ、純粹自我を志向するヴァレリーにとって特権的時間であった。ヴァレリーがアンリ・モンドールとアランを前にして、《私は朝しか仕事をしません。11時で私の一日は終わりです⁴⁾。》と打ち明けたことは周知のところだろう。《純粹で、あっという間の一時》の後、カスーが言うように、《苦い取引》の待ち構えている《市場が再開する》。曙光とともに開示され権力＝権能の孤独な戯れを演習させてくれる純粹時間の白いページと市場との分割！この二重性は無論、厳密に排除しあう関係にあるのではない。そういう絶縁の関係ではなく、一方が、ときに、苦悩をにじませながら純粹さとして濃密に生きられれば生きられるほど、他方は、それだけアイロニカルに役者然として真面目に演じられるだろう。共犯関係をここに見ることは容易なはずである。そして、この共犯性の形式の下で注文生産とカイエ執筆という二重の文学生産様式がヴァレリーの生涯を通じて貫徹されることになるだろう。市場と、権力＝権能の可能性に向かって開かれた潜勢態 puissance の空間とのあわいにおいてヴァレリーの歴史性を捕捉すること、それは、われわれの歴史性をそこに刻印することに等しい……。

ヴァレリーの権力＝権能への志向は、テスト氏とレオナルドの形象のうちに、その内在化と外在化という見かけ上の相異はあるにせよ、発露されている。それは、まずもって、彼の《自己支配》maîtrise de soi という根本的な要請と表裏をなしている。しかし、そこで特徴的なのは、ヴァレリーがこの自己支配のモデルとして軍人あるいは皇帝を選択していることである。ヴィッラーニは青年ヴァレリーの表向きの顔として、「聖書に夢中になり、ド・メーストル、ヴェルレーヌ、ユイスマンスそしてロヨラをさへ利害＝関心と賛嘆の念をもって読む、神秘主義のしみ込んだ、あの若き司祭」を挙げ、それに、「われわれには、いささか未知のままである」もうひとつ別の顔を対置している。すなわち、「権力（権能）を分析し、戦略家として征服を実現するための方法を自

分のために作りだす青年，戦術＝軍事的芸術 *art militaire* について沈思しそれをもっと実用的に，もっと知的に作り直す青年，そして，たとえ最も暴力的な行動であっても，それをことほぎ，弟子にして判事として，ティベリウスとカリギュラを，クラウゼヴィッツとビスマルクを，ボナパルトと[セシル・]ローズ，すなわち，《喜望峰のナポレオン》を観想する青年⁵⁾をいう。自己支配という優れて倫理的テーマの下では，道德的基礎付けとしての哲学的作業よりも，軍隊あるいは政治権力の首長に立つ者が指揮系統を通して，もはや自己ではなく他者を戦略的にも戦術的にも効率よく動員する力への共感がヴァレリーにおいて前景を占めているのである。一言で言えば，序論で述べた《効果へのまなざし》が露呈されているということだ。この意味で，3つのエピソードは紹介するだけの価値がある。ひとつは，ペタン元帥に関するエピソードである。「1931年9月8日。8日12時，廃兵院にて。ペタンは私に両手を首に回して抱擁してくれ (*me donne l'accolade*)，彼の指揮官勲章を私の首 *cou* にかけてくれる——ロールおよびベシエールの両大佐と2人の将校のいる前で⁶⁾。」同年の1月22日，アカデミー・フランセーズの新会員となったヴェルダンの英雄を歓迎する答辞を述べたのが，他ならぬ，ヴァレリーであった。「ヴァレリーのカエサル主義 *césarisme* は彼の青年期，とりわけ，1890年代[cf.1891年のフルミ事件，1892年のヴァレリーのロヴィラ事件，1894年以降のドレフュス事件]に彼の中で発展する権力＝権能への感(受)性と結びついている。ヴァレリーはこの行動への性向を《カリギュラ主義》*Caligulisme* と好んで名付けている⁷⁾。」軍隊の最高首脳から一種の洗礼を受ける象徴的な儀式である。2番目のエピソードはマラルメに関するものである。ヴァレリーは，ローマ皇帝カリギュラがその首を一つはねれば全ローマ市民が自分に服従することになるような人物を探したという故事にならって，マラルメをそのような首になぞらえた⁸⁾。文学のカリギュラが師の首を所望するというわけである。1892年の《ジェノヴァの夜》という神話を構成している《エロース》と《ヌース》のテーマの中の一方向にランボーとマラルメが配されていたことを思いだすべきだろう⁹⁾。このエピソードには，専制的な効果を及ぼすマラルメに抗して彼を乗り越えようとする象徴的身振りが首に集約されている。それはまた，父親殺しの象徴ですらあっただろう……。最後のエピソードは，その《ジェノヴァの夜》のもう一人の神話的人物に関わる。ヴァレリーはロヴィラ夫人のうなじに固着して，《メドゥーサ》，《崇拜すべき壺の形をした黒のトルソと蛇のような首 *cou* を持った，きゃしゃな，顔の青白い，倒錯的な，ひとを不安にさせるブシュケー¹⁰⁾》と形容している。メドゥーサとヴァレリー。これは，作用を及ぼす主体の地位から作用を一方向的に蒙る客体の地位に引きずり降ろされることを意味する。カイエ執筆の動機も，このような自己疎外を克服することにある。《市場》から身をひいて，《自己の存在と権力＝権能のためにだけ取っておか》れた曙光の時間において。権力の暴力的行使とエロースの固着が身体と同じ部位，首に焦点を合わされていることは，やはり，指摘しておかねばならない。石と化したヴァレリーとは，言わば，首をエロースによってはねられたヴァレリーであり，このことがマラルメに対しては主客を入れ代えて投影されてい

る。そのとき、頭という文字を冠したテスト氏の作者がペタン元帥の前で首をさし出す光景は歴史のアイロニーなのだろうか……。一介の株式仲買人として無名を生きる権力なき知的権力者テスト氏を有名にし、アカデミー・フランセーズ会員として栄光を勝ち得ただけでなく、内的危機の際にはテスト氏に指南役を仮託しさえするヴァレリーであってみれば。テスト氏が睡眠という夜の航海を経て目醒める果てには、カイエ執筆が、この世の原初の始まりにも似た純粋な曙光とともに、テスト氏ならぬヴァレリー氏を待ち受けているだろう。そこで見た夢を考察の対象としつつ、人間精神の奇怪なメカニズムを掌握するために。それは、ロヴィラ事件によって一種の精神異常 *aliénation* をきたした結果、疎外＝譲渡 *aliénation* された精神の権力＝権能奪還——自己支配——に向かって開かれている。ロヴィラ事件から2年後の1894年1月16日付ジッドあての手紙でヴァレリーはこう言っている。「想像してみてください、僕は人間嫌いの深みにはまっていたのだから……。僕はもう誰とも会わない、もう友人を友人と認めない、この世の誰をも認めないと思っていた。数日来、一言も口をきいていない。もう自分自身にも語りかけないでいた。それがやっと、今朝——驚くべき気晴らし——ある昔なじみの仲間が、かつての約束に従って、僕の目を醒ましにやって来て狂人の病院の回診に僕を連れていってくれたのだが、それが大変、僕の利害＝関心をひきつけたので、あの男女の性別もない連中をまた見に戻りたいと思っており、自分に再び挨拶するようになった¹¹⁾。」このモンペリエの精神病院訪問は、1916年のアンドレ・ブルトンあての手紙¹²⁾の中でも触れられ、『固定観念』の中にその痕跡を残している。ヴァレリーの精神医学への利害＝関心は、ロヴィラ事件での *aliénation* の経験と無論、不可分であり、それがどの程度のものであったかは、『固定観念』を別にすれば、精神科医を志していた頃のブルトンがヴァレリーにこの方面での研究計画を相談している¹³⁾ことからその一端がうかがわれるだろう。『固定観念』ではこうなっている。

M 《痴呆 *démence* において——用語の通俗的意味でのことですが——私の心を打ったのは何か、わかりますか？ 狂人たちを観察＝観測すること、それは、要するに、自分の……固有な、正常なものと前提された精神を他の精神と比較することです……。それは諸惑星を観察＝観測することです……。》

D 《諸彗星をでしょ！》

M 《自分はある固定した部署の上にいると信じながら、ね。私はそれを数ヶ月したことがあります。》

D 《それをどんなふうにして？》

M 《ある精神病院 *asile* においてです。30年ばかり前ですが……。》

D 《ああ！へえっ！……》

M 《単なる素人＝愛好家としてです。》

D 《ひとから、そう言われたのでしょ！》

M 《回診のあとについて行き、病室を訪れたのです。》

D 《で、それから？》

M 《それから、私の心を打ったのは、収集され、濃縮され、選良されたものとしてそこで目にするあらゆる障害、マニーとか譫妄 *délires*、恐怖症 *phobies* などがすべて、正常と言われる人間にも存在するということです、——ただし、散乱した、限定された、あつという間の、操縦しやすい、散種された、幼虫のような、隠蔽することのできる仕方ですね！わたしたちは天与の痴呆 *démence infuse*、懸濁状の痴呆 *démence en suspension* を持っているのです。わたしたち正常人はですね、可動状の、しかし、かなり安定した平衡状態にある。ところが、細胞の次元あるいはエネルギーの次元での、これこれの出来事が介入してくることがあります……。それまで気づかれないまま、無言のまま、ごまかされたままで見過ごされていた、これらの、他から切り離された小さな混乱が……》

D 《凝固するのです (*se coagulent*) ……。わたしたちは綿状に凝集する (*floculons*) のです……精神的に……。》

M 《大きな、とても大きな症候 *symptômes* としてね。[……]¹⁴⁾》

19世紀末と言えば、フーコーが批判しているように、18世紀末のピネルとテュークの改革によって解放された狂人の自由がほとんどその実質を伴わず、逆に、狂人が精神異常者 *aliéné* としてだけでなく、《自己との関係に対して無縁なもの、すなわち、疎外された者 *Aliéné*¹⁵⁾》として狂気を生きるように仕向けられるに至った時期でもある。そして、このような狂人の地位の変様は、狂人へのまなざしの変様と接続している。「狂人に向けられ、——医学的あるいは哲学的経験が練りあげられてゆくときの出発点となる具体的経験である——まなざしは、もはや同じものではあり得ない。ピセートルあるいはベッドラムを人々が訪問した時代には、ひとは、狂人を眺めながら、人間の真理とその動物性とを分かつ距離全体を外部から測定していた。ところが今や[ピネルとテュークの改革以後]、ひとは狂人を以前よりも中性的に眺めると同時に、以前よりも情念的＝情熱的に眺める。以前よりも中性的にである、というのも、ひとは人間の深い諸真理を、現に今あるがままの人間が生まれついている、あの、眠ったままになっている諸形式を狂人のうちに発見することになるからである。そして、以前よりも情念的＝情熱的にでもある、というのも、ひとは自分をそれと認知するのでなければ、自分のうちに狂人の場合と同じ声と同じ力が、同じ奇怪な光が立ち昇ってくるのを聞くのでなければ、狂人をそれと認知することができなくなるだろうからである。最終的にむきだしとなった人間のある真理を見せ物として自らに約束できるまなざしが、今や、自分自身に固有のものである破廉恥を凝視するのを、もはや避けるわけにはいなくなる。自分を見るのでなければ狂人を見ないのである。そして、狂人は、それによって索引

力と魅惑力を倍增する¹⁶⁾。」

1894年の手紙といい、1932年の『固定観念』といい、精神異常へと傾斜しかけた経験の産物であるヴァレリーの精神病院訪問に批判的注釈を加えるのに、フーコーの指摘ほど相応しいものはあるまい。《エロース》と《ヌース》の重層した経験はヴァレリーに自己支配への欲望と訓練としてのカイエ執筆とを同時に課すに至るわけであるが、両者を貫いている権力＝権能への志向は、確かに潜勢態の形式をまとっている。しかし、この志向に一種の向光性がないかどうか改めて問わなくてはならないだろう……。

フーコーは17世紀から19世紀、そして現代にまで至る sexualité の言説が従来の《性抑制の仮設¹⁷⁾》とは逆に、画一的に沈黙を課せられるよりもむしろ、促進されるようになった権力装置の戦略を分析している。「この sexe に関する言説は権力の埒外において、あるいは権力に対抗して数を増すのではなく、当の権力が行使されたまさにそのところで、しかも、権力行使の手段として数を増していること¹⁸⁾」に着目して、フーコーは知と権力の同衾を衝く。彼によれば、17世紀以来の《生（命）に及ぼされる権力》pouvoir sur la vie、あるいは、《生（命）—権力》bio-pouvoir は《人体に関する解剖学—政治》anatomo-politique du corps humain と《人口に関する生（命）—政治》bio-politique de la population という2つの形式において発達する。その過程でこの2つの形式は相互にからみ合いつつ、《19世紀における権力の大テクノロジーを構成する具体的配置》の中で《最も重要な配置のひとつ》である《sexualité 装置¹⁹⁾》に結実する。それは、ブルジョワジーが貴族に代わって支配階級となった歴史過程と軌を一にしている。しかし、この覇権交代は、《性抑制の仮設》が前提としている2つのテーゼ、ブルジョワジーによる被搾取階級の圧迫というマルクス主義的テーゼとも、資本主義とプロテスタンティズムの禁欲的理想との合致というウェーバー的テーゼとも異なっており、ブルジョワジーが、まず階級としての自己主張の目的で自分の身体を配慮することになったことを意味する。「貴族も又、すでに、自分の身体の特異性を主張していた。しかし、それは、血の、すなわち、先祖の古さと姻戚関係の価値という形式の下で行われた。逆に、ブルジョワジーは、ある身体を自分に与えるのに、自分の子孫と自分の有機体としての健康とを眺めやったのである。ブルジョワジーの《血》とは自分の sexe であった²⁰⁾。」その結果、ブルジョワジーは、《自ら案出した権力と知のテクノロジーを通して自分自身の sexe へ、このように備給＝投資 investissement することによって、自分の身体、感覚 sensations、快楽、健康、延命の持つ高い政治的価格を引き立たせ²¹⁾》、そのため、19世紀には、《sexualité 装置の一般化》を通して《社会体 corps social 全体がある性的身体 corps sexuel を付与されることになった²²⁾》。

フーコーは、このような歴史過程の変様を、貴族が支配階級であった社会を《血の社会》と呼び、ブルジョワジーが支配階級になった社会を《sexualité の社会》と呼んで説明する。《血の社会》では、《戦争の名誉と飢餓の恐怖、死の勝利、剣を持った君主、死刑執行人と拷問など、権力は血を通して語る》のに対し、《sexualité の社会》では、《健康、子孫、人種 race、種 espèce の未来、社

会体 *corps social* の生命力など、権力は *sexualité* について、かつ、*sexualité* に向かって語る23)》のである。

『固定観念』において《医者》と《私》は次のような言葉を交換している。

M 《(……) *Intensité, brièveté, rareté.*》

D 《*Égalité, Fraternité*, 等々。私は、あなたがそこからどこに行きたいのか、さっぱりわかりません。》(p. 39)

われわれは《そこからどこに行きたい》のだろうか？《医者》の言葉がフランス[第3]共和政体の最も本質的な理念を指していることは言うまでもあるまい。《私》の方はと言えば、文脈からわかるのだが、固定観念と密接に関係するオルガスムの定義を3つの語で行っているのである。女性抽象名詞を形作る接尾語の共通性に着眼した単なる言葉遊びと、受け流してしまってもよいものかもしれない。

しかしながら……。たとえば、こういう例もある。『固定観念』から《30年ばかり前》(《私》の言い方)の1894年、つまり、《神経症のナポレオン²⁴⁾》と呼ばれたシャルコーの死の翌年、レオン・ドーデは『死の栽培者たち』(*Les Morticoles*)を出版していた。その中で、ドーデはヴァレリーと同じ言葉遊びをしている。《*Liberté, Égalité, Fraternité*》に対して、《*Vanité, Hérité, Fatalité*》と付けている²⁵⁾。しかし、見落としてならないのは、アカデミー・フランセーズ会員と後のアカデミー・ゴンクール会員とでは、接尾語への着目は同じでも、決定的な違いが存することである。後者の機知は第3共和制理念に対する端的なアンチ・テーゼを構成しているが、それにひきかえ、前者の機知には、そのようなアンチ・テーゼの不在が現前している。あるのは、『固定観念』のフォルムを形成する連想の突飛さだけである。《自由・平等・友愛》と《強烈さ・短さ・稀少性》との縁組は、実は、フーコーが指摘していたように、ブルジョワ権力による《自分の *sexe* への備給＝投資》を通して形成された《*sexualité* の社会》において《*sexualité* 装置》が《社会体 *corps social*》と個人の身体の両面に隅々にまで浸透していった歴史過程の痕跡を語っているのである。従って、《医者》と《私》の言葉のあの交換には、単なる言語上の連関以上に、たとえヴァレリーがそれを意識していたにせよ、いなかったにせよ、ブルジョワ社会の《*sexualité* 装置》という権力形式が、かすかに、しかし、見紛いようもなく、刻印されていると言わなくてはなるまい。マラルメの首をはねれば文学は死滅すると想像したヴァレリーは自分をカリギュラと同一化しているが、その首はまた、ロヴィラ夫人というメドゥーサの首でもあったことを思い出そう。19世紀末の一青年がローマ皇帝に同一化するとは、どういうことなのか。フーコーが言うように、《生(命)―権力》は、《古典主義時代》の君主の持つ《生と死の権限》と対極にある。しかも、この《生と死の権限》は、《かつて、自分の奴隷の生命と同様に、わが子の生命をも《処分する》権限をローマの家父に与えて

いた古い父権 *patria potestas*》の、《すでにかなり弱められた形式²⁶⁾》であった。あたかも、ヴァレリーは、《生(命)―権力》の浸透したブルジョワ的《sexualité の社会》において、権力の古型への同一化を通して首のファンタスムを生きているかのようである。

第3共和制とオルガスム！社会体が《sexualité 装置》を介して個人の身体と接続することによって、《個人を規定する様態としての身体の中に》sexualité を内包する《生(命)―権力²⁷⁾》の歴史的展開において、とりわけ、19世紀末から20世紀前半までの政治的過程において、《sexualité の社会》を読み解くための症候があるとすれば、そのうちのひとつが梅毒をめぐる葛藤である。「われわれはみな、骨の中に瘡＝梅毒 *vérole* を持つように、血管＝静脈 *veines* の中に共和制的精神を持っている。われわれは民主主義と梅毒とに感染している」と述べたのはボードレール²⁸⁾であるが、この病氣＝悪は第3共和制下において最も強烈な政治的機能を備給＝投資されることになるだろう……。

第1章 梅毒と変質

『固定観念』における2つの場面を引用してみよう。ひとつは、従来の実証主義歴史学では政治的事件のみが特権視され、その結果、歴史に欠落が生じたとして、コロンブスのアメリカ発見によってヨーロッパにもたらされた《梅毒》の歴史的意味を研究するだけの価値が十分にあるという文脈の中での言葉である。

M 《(性)愛はまさしく舵の発明に苦しんできました。》

D 《あなたはとてもものわかりがよい。アメリカは、すぐにも、小さな青白い人物 *un petit personnage pâle* [梅毒トレポネーマは *tréponème pâle* という]をわたしたちに送ってよこすのですから……。》

M 《この人物の子孫たるや、わたしたちの間で驚異的な効果をあげてきました。わたしたちはみな、ちょっぴり、この人物に憑きまとわれているように、そして、この人物がいなかったら、非常に多くのことが夢見られることさえなかったかもしれないように、見えます……。》

D 《あなたの言い分は百倍も[全くもって]、ごもっともです。しかと信じて下さい、梅毒のヨーロッパへの導入はユトレヒト条約よりも、もう少し重要な事実であるということを、ね。》

M 《私もそうではないかと思っています！》(pp. 37-8)

梅毒とユトレヒト条約を比較する《医者》の文句については後で論究することにして、さしあたって重要なのは、『固定観念』が出版された1932年までの梅毒の脅威である。ヴァレリーが推挙するように、《公の事件》（ユトレヒト条約）（p. 37）についてではない歴史を垣間見ようではないか。たとえば、両大戦間に行われた保険会社の調査によれば、フランスの「人口の恐らく10分の1、すなわち、400万人が梅毒に苦しみ、1年に14万人が梅毒で死んでいた。毎年4万人出た死産児は梅毒が原因とみなされていた。[……]梅毒がこんなに猛威をふるっていた本質的理由は、[フランスの]各政府が偽善的な沈黙をそれに対置させていたということにある。医学アカデミーは1887年に梅毒を食い止める手段を見つけるための担当委員会を任命した。保健衛生と道徳高揚の両面からの予防対策協会が1901年に設立された。ところで、議会はついに1907年、梅毒問題の審議会を組織するに至ったとはいえ、何らの対策も講じなかった。[第1次大]戦が政府側のいくつかのイニシアチヴに拍車をかけた、とりわけ、軍隊において。他の多くの同趣旨の機構とともに、1924年、性病禍対策国民連盟が設立された。しかし、アメリカ合衆国で確立された義務治療に比較できるものは何もなかった。19世紀には、既成の治療は極めて不十分なものであった。病院でも、この種の病人に割り当てられたベッド数は非常にわずかしくなく、看護婦の中にはそうした病人の入院を拒む者さえいた。1871年までパリの病院の中で性病専門の主要な病院であったルールシーヌ病院 hôpital Lourcine は、道徳的に責められるべき者とみなされたこれらの病人を罰するのに地下の独房しか提供しないでいた。この病院に姿を現わすことは大抵に自分の病気を告げるに等しく、そのため、多くの病人の出鼻をくじくことになった。真の変化が介入したのは、ようやく、1880年、アルフレッド・フルニエ Alfred Fournier が自分のために創設された最初の性病担当講座の教授に任命されたときになってからであった。[……]性病問題全体は、この問題に責任があるのは売春婦たちであり、従って、彼女たちを監査すればそれで十分だとする神話によって紛糾していた。性病を減らすうえでもうひとつ、主要な障害になっていたのは、似非-治療をほどこす山師の多さであった。彼らの広告が男子用共同小便所の壁をおおい、医師協会の本質的活動のひとつは、こうした山師と戦うことであった。梅毒は当時の悲惨と苦悩の主要原因のひとつであったのである²⁹⁾。」

以上の指摘でわかるように、《私》が、《わたしたちはみな、[梅毒トレポネーマなる]人物に憑きまとわれている》と言ったのは、誇張でもなんでもなかった。しかし、梅毒をめぐる、感染率の高さと医療機関の対応のまずさだけをあげつらうために、この対話を引用したのではない。梅毒のテーマは、《民主主義と梅毒》と言うときのボードレールの直観にある、この《と》の、すぐれて政治力学的テーマでもある。それをこれから少しずつ解きほぐしてゆくためには、精神医学史の方へ迂回しなくてはならない。

フランスの《精神医学における器質論の創始者》ペイル Bayle は、《後に進行麻痺と一般に呼ばれる慢性クモ膜炎》を精神医学の広大な領域の中に1つの特別な疾患》として《独立させ》、進行麻

痺の病因の1つに梅毒を発見した³⁰⁾。ペイルによる進行麻痺の梅毒病因論はモレル Morel の《変質》dégénérescence 論に受けつがれる。「ペイルの学説とともに梅毒という病気=悪は変質に関する[モレルの]学説に接木されることになり、大きな瘡=梅毒 grande vérole[天然痘は petite vérole という]は、生殖器という基体から離れることのない sexualité の特権的な場となるだろう³¹⁾。」この変質概念は、フーコーによれば、法医学の領域と政治的イデオロギーの両方に波及する。後者については、少し後で引用するモーゼの『出エジプト』に関する対話のところで取りあげることにして、まず、法医学への変質概念の波及効果とは何か？《法的-医学的装置》において刑事裁判の分野に精神医学が導入され、その結果、変質と変質者 dégénéré のテーマが狂気による刑事責任の可能性に関する法医学体系として構築される³²⁾ことをいう。いまだ《変質》という言葉こそ使われていないが、《恐るべき犯罪として突如爆発することのある³³⁾》狂気へのほのめかしを『固定観念』から引用してみよう。

M 《わたしたちは自分に何がやれるのかあまり知ってはいません。見てもご覧なさい、自分のしたことが信じられない犯罪者が何と多くいることか、しかも、彼らは、まさに行動するまではそんなことを考えついたこともなかったのですからね……。》

D 《あなたもそう信じているのですか？》

M 《そう信じています。その犯罪は、ある者たちにとっては、突然肩の荷を降ろすようなもの une manière de soulagement brusque でしかなかったのです、で、肩の荷を降ろした後では、忘却のあらゆる力がすぐにも働きだし、当人=その男 l'homme は釈放されるというわけです……。》

D 《無実となって、前よりも清らか pur になって……。》

M 《ええ、前よりも清らかになって、恐らく……。》

D 《それで、彼があなたに相談しにやって来ていたら、あなたは彼に殺人をすすめていたのでしょうか？》

M 《問題はそんなことではないのです。私はあなたに犯罪理論を作ってあげているわけではありませんから。私は、ひとつの行為を表象しようと努めているのです……。》(pp. 67-8)

二人のやり取りは、狂気の犯罪責任に焦点を合わせているという意味で、たとえば、3つの事件に送り返す。ひとつは、1907年1月31日ソレイヤンが友人夫婦の娘を殺害した事件である。裁判の過程で、《犯罪を犯した精神異常者 aliéné の刑事責任の問題》がとりあげられ、ソレイヤンは死刑判決から一転して恩赦を与えられる³⁴⁾。もうひとつは、1925年8月23日ルフェーヴル夫人が息子の嫁をピストルで射殺した事件である。翌年の裁判でルフェーヴル夫人は刑事責任の資格あり

とされ、死刑を判決されるが、この頃には女性のギロチン刑はもはや実施されていなくて、大統領の恩赦によって無期禁錮労働を言い渡される。さらにその翌年、フランスではじめて精神分析家が鑑定医の報告に対して疑義を呈し、法廷闘争の武器としてフロイト理論を援用する。すなわち、マリー・ボナパルトはルフェーヴル夫人の刑事責任の無効性を主張して『フランス精神分析雑誌』でそのキャンペーンを展開する。彼女によれば、この事件は、《推理できる人間の計算づくの残忍さが問題ではなく、犯罪によって自分の汚れ *souillures* から癒されると感じている迫害妄想の女性 *femme persécutée* の狂気が問題であった³⁵⁾。》最後に指摘したい事件は、前の2つの事件と違って、実際に起こった犯罪事件ではない。ブルトンの『ナジャ』が出版されてから1年後の1929年11月に、小説のある一節が物議をかもす。それは、「もし私が狂人となって数日入院させられているとすれば、私の譫妄 *délire* がそれでも私に小康状態 *rémission* を残してくれるなら私はそれを利用して、わが手にたまたま落ちかかってくる者たちの中のひとりを、えり好みして医者をも、冷やかに殺害しているだろうということを私は知っている³⁶⁾」という一節である。これに基づいて医学心理学会は精神科医の身の安全、さらには社会の秩序の名の下に『ナジャ』とその作者を告発し、新聞がこれに加勢してセンセーションを巻き起こす。ブルトンの方も『シュールレアリスムを前にした精神医学』という論文を発表して対抗する。そのとき、彼は、社会保全の大義の下に個人の自由が犠牲に供されることの非を糾弾し、先に触れたルフェーヴル夫人事件を引き合いに出してナポレオン刑法第64条を批判するのである³⁷⁾。先の対話は、実を言えば、このナポレオン刑法第64条に関わるやり取りである。『固定観念』には、さらに、ナジャが措置入院させられる破目になったとき、適用された1838年法 (p. 159) が出てくる³⁸⁾。刑法第64条と1838年法とは、《精神医学的知が狂気を後見 *tutelle* するにあたって、フランスでは2つの根本的な条項を経る³⁹⁾》という、その2つの条項である。対話が、もし、こうであったとすれば……？

D 《彼が、ブルトンが、あなたに相談しにやって来ていたら、あなたは彼に殺人をすすめていたのでしょうか？》

M 《問題はそういうことではないのです。私はあなたに犯罪理論を作らせてあげているわけはありませんから。》

《私》は後催眠暗示を戯れながら《医者》に治療医学史を、せめて19世紀から20世紀にかぎってでよいから、書いて『脳髄』*L'Encéphale* 誌に載せるように仕向ける⁴⁰⁾が、その同じ専門誌の1925年7月6日号に、ある論文が載っている。フランス精神分析家の第1世代に属するポール・シフがアントームと共著で発表した『いくつかの法医学適用例の視点から考察された精神分析』という論文である。それは、フーコーが指摘した、法医学的体系の中核である変質と変質者の理論に対する批判であった。著者たちは、《犯罪学に関して遺伝—変質 *hérédité-dégénérescence* の過度な

までの理論[フーコーが《性倒錯－遺伝－変質という集合＝総体》と呼んでいるもの⁴¹⁾]が挫折したことを確認し、フロイト理論の、この方面での有効性を強調している⁴²⁾。その結果、法医学の中にフロイト理論がからめ取られる破目になり、後にこの問題は精神分析家の間で論争の対象となるのだが……⁴³⁾。ここまでは、ベイルによる進行麻痺の梅毒病因論から出発して、モレルの変質概念、この概念と法医学との癒着、精神分析の法医学への介入と、ささやかな系譜をたどってきた。この意味で、確かに、《梅毒のヨーロッパへの導入はユトレヒト条約より、もう少し重要である》と、ヴァレリーとともに言わなくてはならないのかもしれない。

次に問題となるのは、フーコーが指摘した変質概念のもうひとつの波及効果、政治的イデオロギーとの接続である。だが、その前に少し……。『固定観念』に『出エジプト』の物語が話題となっている。

M《昔、ひとりのファラオがいました。彼はある魔術師団をかかえていました。》

D《哀れな人間ですね……。》

M《そこへモーゼが介入する。》

D《そうだと思いますよ。介入するものが何もないければ、歴史＝物語なんて存在しないはずですからね。》

M《ごもっとも。そこから小説理論を作ろうと思えば作れます。》

D《全く、それには及びません。モーゼを見ましょう。》

M《介入したモーゼは様々な驚異を起こして王を仰天させる……。水を血に変えたり、離れたところから魚を殺すとか……。》

D《それは悪くない……。それが将来の戦争というものです！》

M《魔法使いたちは、むきになる……。》

D《彼らは嫉妬深いのです、まったくね！……そういうものです。彼らは役人です、要するに！》

M《その通り……。》

D《歴史は真実でなければならない。》

M《それで、ファラオは競技会を開く……。》

D《彼は敢えてそうしたのですか？……あの粗野な奴らに対して？》

M《……らしいですね。それが寄食者たち parasites の競技会だったのです。》

D《まさに私もそう考えていました。皆、先を競って律儀なファラオをダシにして暮らし(生き)ていたようですね。》

M《いいえ、そうではないのです……。職務上 *ès qualités* の寄食者たち parasites が問題なのです……。敢えて言わせてもらえば、固有な意味での *au propre* 寄食者 (= 寄生虫)

parasites がね。カエルとかバッタ（イナゴ）sauterelles とか……。》

D《でも、それは寄生虫ではありませんよ……。》

M《蚊ですよ……。》

D《いやはや！……ハマダラカですか！……ファラオは進行麻痺患者 paralytique général でした……。これは明らかです。》

M《モーゼの方と言えば、彼は全力を尽くしました。悪＝病気と破局をまき散らしたのです。》

D《彼は本当の政治家だったわけですね……。で、彼は勝ちましたか？……。》

M《でも、私があなたに語りたかったのはこの物語＝歴史ではないのです。アラビアのコントを語りたかったのです。このコントの方がもっと相応しいと私は思うのでね……。》

(pp. 116-8)

ユダヤ教の創始者モーゼが戦う相手側のファラオが《医者》の言うように、《進行麻痺患者》であったなどとは初耳であり、とても、《これは明らかです》とは言えない。医師団を読者としていた『固定観念』について当の医者の一りが書評を書いているので、それを紹介しておこう。ピエール・モーリアックは次のように言っている。「《固定観念》のような書物の弱点は、ごく限られた読者層にさし向けられていることである。多くのページが医者たちのために書かれているため、そこが門外漢には理解できないこともあるだろう。そして、ヴァレリー氏の崇拜者たちの中には彼の新作を是非とも知りたいたいと思っている人が多くいるので、私は、彼らが失望するのではないかと心配する。確かに、門外の者にとっては読書がしばしば苦痛なものになることがあるにちがいない。[……]すべての人にとって自明であるとは言えないような塩＝妙味 sel を含んだ、ほのめかしの箇所がある。たとえば、寄食者の一団を召しかかえていたファラオの物語をヴァレリー流に語るところなど。カエル、バッタ（イナゴ）、蚊。《いやはや……ハマダラカですか……ファラオは進行麻痺患者でした……これは明らかです》。マラリヤ療法について何ひとつ知らないものはないヴァレリー氏にとっては、いかにも、[明らかであるかもしれない。]しかし、マラリヤ paludisme を媒介する蚊がハマダラカと呼ばれ、進行麻痺はマラリヤ患者の血を注射して治療するということを権利上知らなくともよい平均的読者にとっては、そうはいくまい⁴⁴⁾。」啓蒙の労を取ってくれたピエール・モーリアック博士に感謝すべきところかもしれない。しかしながら、博士には失礼だが、ハマダラカと進行麻痺の関係、後者の治療法について博士から教示されても、博士自身が言っている《ヴァレリー流に語る》ことの《塩＝妙味》が博士の書評ではついぞ解き明かされていないのは残念という他ない。ヴァレリーと同時代人であったモーリアックは医者としての立場に目がくらんだのか、われわれとしては、博士に《失望》し、書評家に《及ばした悪影響とい

うことで《博士に《恨みを抱き》たいところである。しかし、モーリアックの書評には、恐らく期せずして、ある皮肉が含まれているのだが、しかるべきときまで、しばし、博士に退場していただく。

《私》はモーゼに関する物語よりもアラビアのコントをむしろ語りたかったのだと言っていた。両者の関係を《私》の口から説明してもらうに如くはない。

《それ[アラビアのコント]はとても美しいコントです……。でも、私はそれに思いをはせています……。たしか、聖書の中にもこれと似たコントがあるようです。それは恐らく、[アラビアのコントと]同じテーマのひとつの異文 *variante* あるいは、ひとつの変質 *dégénérescence* でしょうかね?》(p. 116)

ここで《同じテーマ》と言われているのは、魔術師とモーゼの場合と同様に、《ネコ》、《ネズミ》、《トラ》、《ライオン》、《蚤》、《細菌》*microbe* といった生き物の、変身による対立抗争 (p. 119) を指す。聖書とアラビアのコントの間には《異文》の関係があるのかもしれないと仮りに《私》が言っていたとしても、意味はそれで尽きていただろう。それにもかかわらず、《変質》*dégénérescence* という言葉が付加されているのであってみれば、それだけでも意味の過剰である。ただし、その意味の過剰は付言そのものから来るだけでなく、あるいは、それ以上に、《変質》という言葉のまとった付加価値そのものから来る。なぜなら、変質概念は、フーコーによれば、ドレフュス事件までは社会主義者によって、次いで右翼によって、反ユダヤ主義の武器として政治的に乱用されていたからである⁴⁵⁾。しかも、反ユダヤ主義を含めた人種主義ということであれば、《変質》を口にする《私》の言葉より少し前のところで、《医者》は、《先夫遺伝という旧理論》*ex-théorie de l'imprégnation* の例に、《白人の女性が黒人の男性と結婚する。彼[黒人であるその夫]の葬式を出し、白人の男性と再婚する、すると、この白人の男性を父にして彼女は、ぞろぞろと生まれてくる黒人の子供たちの母となる……》と言っていた。白人と黒人と言えば、人種主義に典型的な対立項であることは断るまでもあるまい。たとえば、モーリス・バレスは、1899年のレンヌでのドレフュス再審に触れて『私の手帖』の中に書いている。「もはや問題はユダヤ人の貧弱な大尉に関わるのではなく、問題はセム主義とアーリア人種の永遠の闘争に関わるからです。[……]私はユダヤ人は一人種であると思います。さらにいえば、一個の種であると。ユダヤ人は黒人、黄色人種、インディアンなどと同様に、生まれながら特殊な類人猿であると真実思います。[……]今日、これらの類人猿どもはあまりに危険なものとなりました。もはやこれを許容すべきではないのです⁴⁶⁾。」第3共和制の最も象徴的な事件のひとつであるドレフュス事件において顕在化した葛藤は、1906年7月12日破棄院でのレンヌ軍法会議の判決破棄によってドレフュスが無罪となってからも、フランス社会にくすぶっていた。『固定観念』が出版される1年前の1931年2月、サン＝マ

ルタン大通りのアンビギュ座でドレフュス事件を扱ったドイツの戯曲がジャック・リシュパンの脚色により初演されたとき、例のアクション・フランセーズの突撃隊カムロ・デュ・ロワが劇場に押しかけ乱暴狼藉を働いている⁴⁷⁾。《医者》は《モーゼは勝ちましたか?》と《私》に尋ねていた。これは奇妙である。確かに、《医者》は、《ここだけの話ですが私は聖書を無論、一度も読んだことがないのです》(p.116)と告白していた。しかし、たとえ読んだことがないにしても、出エジプトを果たしたモーゼが勝ったかどうかということくらい知らない方が余程、不自然だろう。しかも、もっと奇妙なことに、《私》は、《あなたに語りたかったのは、[モーゼについての]この物語ではなかったのです》と答えたにすぎない⁴⁸⁾。これは《私》の回避である。なぜなら、自ら出エジプトの話を買って出た《私》が《モーゼは勝ちましたか?》という問いを文字通り受け取っていたら、これほど答えるのに容易な問いもなかっただろうからである。条件反射的に、《そんなことも知らないのですか?》と言って《医者》の無知にあきればはてた素振りを見せてもよさそうなくらいだ。では、実際に、《私》が出エジプトから《アラビアのコント》に話題を転じると、どうなるか? M《ネズミとなった相手をむさぼり食うために、ある者はネコになる》——D《ネズミ退治》——M《当のネズミはトラになる》——D《すると、当のネコはライオンになる》——M《当のトラは蚤になる》——D《ブラボー!しかし、当のライオンは細菌 microbe になる》(p.119)という具合に、モーゼと、あの《寄食者》=《寄生虫》との抗争は茶化されると同時に、一層、激しさを加えた印象を与えられている。そして、勝ったのは一体誰なのかは、ますます、わからなくなっている。ここで、《モーゼは勝ちましたか?》という問いを、《ドレフュス裁判はドレフュス(派)の勝訴だったのですか?》と書き直すとすれば……。1899年に反ユダヤ主義者としてつとに有名なドリュモンの『リーブル・パロール』紙がアンリ中佐未亡人と遺児の救済キャンペーンを展開したとき、《3フラン、熟慮の末》と反ドレフュス派のリストに記載したヴァレリーは何と答えていただろうか。《医者》が言っていたように、《歴史は真実でなければならない。》少なくとも、《私》=ヴァレリーは、『出エジプト』のモーゼは勝ったと容易に断言できるほどには、ドレフュス裁判はドレフュス(派)の勝利であったと答えるわけにはゆくまい。ドレフュスは無罪になったとはいえ、事件の真相はうやむやのまま結審した以上は、事件後も反ユダヤ主義は雲散霧消したわけではなかった以上は。もう一度、モーゼの場面に立ち戻れば、4つの語が言わば《parasites》のようにテキストにこびりついている。まず、《変質》dégénérescence。反ユダヤ主義の常套語。次に、《寄食者=寄生虫》parasites。これも反ユダヤ主義の常套語。たとえば、フーリエの弟子トゥスネル、彼から影響されたドリュモンなどはユダヤ人攻撃のためこの語を使う⁴⁹⁾。最後に、進行麻痺患者とハマドラカ。進行麻痺に関するペイルの梅毒病因論を通して梅毒が変質概念にとりこまれたことを思い出そう。そして、3人の人物がドレフュス事件の中から浮かびあがる。ドレフュスが軍法会議で終身流刑を言い渡される元凶となった極秘文書の偽造者で、当時、統計課と呼ばれた情報部部長サンデール大佐は梅毒性進行麻痺患者であった。自殺した例のアンリ中佐は1887年以来サンデールの補佐であった

が、植民地勤務でマラリヤにかかったことがある⁵⁰⁾。アルフォンス・ドーデと同じくニームに生まれ、象徴主義にアナーキスト批評家として加わり、また、同化しないユダヤ人を激しく非難するが、ドレフュス事件の過程で、一転して非同化ユダヤ人批判を止めて排外主義ともショーヴィニズムとも異なるユダヤ・ナショナリズムの立場から、ドレフュスの、ユダヤ人の正義のため論陣を張ったベルナール・ラザールは当時、モーゼの再来とみなされていたとしても何ら異とするに足らない⁵¹⁾。1899年に反ドレフュス派にその名を連ねたヴァレリーは、ドレフュス派であったアナトール・フランスの後を襲って、1925年11月19日にアカデミー・フランセーズ会員に選ばれたとき、「演説。ア[ナトール・]フ[ランス]。ドレフュス事件。彼を、ひとつの永遠の事件の変形とみなすこと。哲学に助けを求めなくてはならないのは、ここだ。」(XI-221)とカイエに記している。彼は、1899年の反ドレフュス派への署名を忘れてはいなかった。左翼でも右翼でもなく、総じて党派というものに警戒を怠らなかつたヴァレリーの政治的立場も多分にドレフュス事件に対する自分の姿勢への反省から生まれたと言っても過言ではないだろう。かつて『海辺の墓地』の中で《Midi le juste[……]》(《正午、この公正なものが[……]》)と歌ったヴァレリーであってみれば、四季の秩序正しい反覆の中に正義観の根幹を見た古代ギリシア人の信仰への遠い反響をそこに読みとることも可能だろうし、《Midi le juste》は詩人の政治的信条を恐らく期せずして要約していたとみなすこともできるだろう。それは、南仏 Midi 生まれのヴァレリーにこそ相応しいものであったかもしれない。

『固定観念』の中で《私》と《医者》が言葉を交換する場所は海岸であった。ジュディス・ロビンソン＝ヴァレリーの言うように舞台が《医者》のモデルとされるルイ・ブールの別荘所在地アゲー Agay であるとすれば、次のような言葉はやはり聞き捨てならない。二人が沖に浮かぶ一隻の船を見ながら対話を交わす場面⁵²⁾である。

M 《あれは小型帆船 tartane です。彼らはレンガを運んでいるにちがひありません、恐らく。》

D 《要するに、船は船でしょ！》

M 《いいえ、あれは小型帆船ではありません。失礼。あれは古びたスクーナー goélette です。よ！……イタリア船籍でしょう、たぶん……。あれが航行して恐らく60年になるでしょう。[……]それに、ちゃんと沖に出ている。》

D 《ということは、パリが存在するということですね！……。》

M 《もちろんですとも。》(p. 75)

この場面で強調しておきたいのは、次の2点である。まず、沖に浮かぶスクーナーを見てパリを連想していることである。この連想の《糸》をたぐり寄せることは、さして難しくない。パリの船乗りたちの《組合の徽章》から採られた首都の紋章が《Fluctuat nec Mergitur.》(《波にただよえ

ども沈まず))である⁵³⁾ことを想起しさえすればよい。もうひとつの点は、パリの名が発せられると、彼ら二人は、地中海に臨むアゲーの海岸で、晴れわたった天気の中、表面的にはのんびりと過ごしている夏の日とは反対に、《活動病》に荷まれる首都の生活を思い出すことである。スクーナーの航行歴60年というが、その60年とは、ヴァレリーの生まれた年であると同時に第3共和制が成立した年でもある1871年から1931年までを指す⁵⁴⁾。すなわち、第3共和制下のパリである。

D 《と言うことは、どこかで……私を呼び出す電話があるということですよ！……そして、喧騒と、車と、雨と、あわただしさと、人々と、新聞とがね！……そして、しなくてはならないし考えなくてはならない一切のことの神の雷^{いかずち}の一切がね……。》

M 《どうしようと言うのです、先生、わたしたちは良き時代のギリシア人ではないのですからね。》

D 《彼らは運がよかった、あの人たちはね……。彼らは何もしないでことをなす[《活動病》の反対]手段とか、砂の上でパイプをくゆらせながらこの世の仕事のなかで最も美しいものを産み出す手段を見つけていたように私には思えるのです。》

M 《彼らは繊細であったからそれができたのです。しかしながら、彼らはタバコを吸ってはいませんでしたよ、思うに。》

D 《その通りです。これは[記憶の]欠落です……。私にはパイプなしの彼らというものを思い描くことはできないのですよ、あのすべての哲学者というものをね。》

M 《プラトンのパイプですか——でも、それだったら、タナグラ Tanagra かミリナ Myrina のパイプだったでしょうね。[……]。》

D 《哀れですね、わたしたちは！……これは好奇心をそそります……ここからだ、わたしたちの[パリでの]日常生活は思い描くこともできないと思いませんか？……私は自分が毎日していることを思うと、悪夢を前にしてたじろぎますよ……》(pp. 75-6)

ヨーロッパ文明の発祥の地と20世紀前半のパリとを比較する場面はもう一度、しかも少し調子を変えて、出てくる。

D 《[……]先程、ここで眼福にあずかりながら、そこに、わたしたちがパリで送っているあのいまましい生活について、あの、物事と人間と観念との謝肉祭一切について、近い将来、そして遠い将来にわたって案じるときの倦怠をにじませながら、そうしたこと一切を遠近法に見て……。あなたは例のギリシア人の話をしました……。》

M 《ええ。ギリシア人というのは重宝な表現ですよ。それは神話に属します……。それは、身体的には甘美な、あるいは壮麗なまでに本能的な生活のひとつのモデルと、精神にと

っての、自由および厳密さの結合したひとつの理想とを喚起することです。しかし、わたしたちはそこに、わたしたちのものである多くのものを込めているのです。》(p. 106)

ここには、最初の場面にはなかった批判の調子が、たとえ微弱であるとしても、神話批判が読みとれる。地中海の波が洗うアゲアの海岸でパリと古代ギリシアのアテネを想う！このような想念が形作る対話空間に、ある政治的過程を介入させるとすれば、どうなるか、1789年の革命以来フランスが民主主義の構成原理を政治機構としてはじめて確立していった第3共和制において？

「1924年左翼連合が選挙キャンペーンに乗り出すにあたって、《共和派政党》の学説と綱領の精髓を一つにまとめるとき、リュシアン・レヴィ＝ブリュールは、《共和制の理想》を開陳する任務を与えられ、次のような見事な文章の中で、この理想の起源をギリシアのポリスにまでさかのぼらせている。《ギリシアのポリスにおいて、僭主政治に抗して自由のために戦う市民たちのヒロイズムが歴史家と弁論家のお気に入りのテーマとなると同時に、理性に合致した法の神聖性という理念が詩人と哲学者によって壮麗なまでに表現されたとき、この共和制の理想は生まれた》。1931年にエドゥアール・エリオを祝福するとともに《急進党の大テーゼ》の経緯をものしたジャミー＝シュミットなどによって、この文章は、批判なしに、うやうやしく再びとりあげられることになるだろう⁵⁵⁾。しかし、同じく古代アテネを語るにしても、共和派とは正反対の立場に身を置いた人物が一人いる。シャルル・モーラスである。1896年第1回近代オリンピック大会に王党派の新聞『ガゼット・ド・フランス』紙から派遣されたモーラスは、友人のバレスから、アテネから民主主義への憎悪を持ち帰るとは、と仰天させる⁵⁶⁾。彼は、古代アテネの民主政治が貴族制の遺産を食いつぶしたと妄想して、否、悟って、カペー朝以来の《祖国の40人の父たち⁵⁷⁾》によって築かれたフランスが第3共和制下で古代アテネと同じ運命をたどらないようにするには、フランスは世襲君主制に戻らなくてはならないという必然性を啓示されるのである。《医者》がパリでの生活を描写していた言葉を改めて思い出そう。《喧騒と、車と、雨と、あわただしさと、人々と、新聞とがね！》。喧騒と新聞！「ドレフュス事件は、真に、新聞の黄金時代であった」と言ったのはティボーデ⁵⁸⁾であるが、その中でも『アクション・フランセーズ』紙がひととき、ネガティブな異彩を放っていたことを知らぬ者はいまい。ドレフュス事件に端を発した新聞の隆盛がどんな程度のものであったかを知る格好のエピソードのひとつが、ガブリエル・シヴトン事件である。《1902年の選挙でパリ第2区から下院議員に当選し、根拠なしに当選無効となり、それから再選された⁵⁹⁾》シヴトンは、1904年11月4日下院において、当時、陸相であったアンドレ將軍が陸軍の登録カード作成を悪用してドイツに流したという嫌疑をかけられていたことに義憤を感じて陸相に平手打ちをくらわせる。この事件の後、シヴトンは、友人たちの発行する新聞から期待していたほどの援護射撃を得られなかったため、自ら王党派の新聞を発刊して自己を正当化しようと決意する。シヴトンの新聞は結局、1904年12月9日に開始が予定されていた裁判のまさに前日、被告の死去（自

殺か他殺かで物議をかもす)でうやむやとなった⁶⁰⁾とはいえ、このエピソードは新聞を出すこと自体がいかに安易であったか、いかに政治的信条のプロパガンダのために新聞が重要な役割を果たしていたかを如実に物語っている。『アクション・フランセーズ』紙のレオン・ドーデは事もなげに言っている。「現代において、追求される政治的企てが何であれ、その主要なテコは新聞であって、この新聞の重要性というものはすべてを凌駕しすべてに優先する。このことは真実であって、いかなる運動も、その良し悪しに関係なく、その頭＝トップに、そしてその起源に、ひとりのジャーナリスト、ひとりの作家を持っている。反ユダヤ主義はドリュモンを持った。ドレフュス派はゾラを持った。君主制復活は今やモーラスを持っている。チャンピオンを持たなければ、日刊の機関紙を持たなければ、大義といえども、世論を夢中にさせる(＝それに情念を刻む)ことは決してできないだろうし、活動的＝能動的にもなれなければ勝利をおさめることもないだろう⁶¹⁾。」1931年2月の、サン＝マルタン大通りにあるアンビギュ座でのドレフュス事件の上演のとき、アクション・フランセーズのカムロ・デュ・ロワは《介入の口実を見つけ》、《けたたましい物音を立てながら乱入し、悪息を放つ球を投げて、殴り合いが大通りで続けられた。彼らの敵である左翼側も数日後、報復に出て、すぐにも、共和国広場からサン＝ドニ門にかけて、毎晩、暴動があった。2月末ころには、他の右翼リーグがカムロ[デュ・ロワ]に加わった。愛国青年 Jeunes Patriotes がまず、現われ、クロワ・ドゥ・フ Croix de Feu が続き、王党派たちのかたわらで[敵と]殴り合い、彼らとともにわめいた、《軍隊万才！ユダヤ人を倒せ！⁶²⁾》

D 《[……]それにしても、通り＝街頭 rues は、(そして、岩場ですら)固定観念にみちみちて
いますね。……。》

M 《ごつごつとした＝ぞんざいな Frustes, そして、徘徊する ambulatoires 固定観念にね！
……》(p. 27)

このとき、固定観念とは、《parasite》(p. 13)として《私》を悩ませる病のことだけでなく、左右両翼の、たとえば共産主義社会の理念、たとえば、君主制の理念にとり憑かれた人々が通り＝街頭に降り立ちデモを、乱闘をくり広げる政治状況をもほのめかすだろう。「軍国主義、規律崇拜、行動への高揚、言葉さらには知性の信用失墜は、[ブーランジェ運動とともに生まれドレフュス事件で洗礼を受けたナショナリズムの]反議会主義へと収斂する。体制は、権威を弱体化し権力を弱め世論を細断する諸政党の分裂の責任をとらされる。言葉は分裂させ、行動は一つに団結させ、力は結集させる。この反議会主義には2つの抜け口がある。すなわち、通り＝街頭での擾乱と、スキャンダルを待ちかまえ、それをまんまと利用するに敏で、必要とあればスキャンダルをでっちあげる用意のある新聞上での論争である。右翼政党はそれまで常に街頭への懸念をつかっていたので、民衆の力の暴発をひきおこさないように絶えず気をつけていた。街頭と都市は、

田舎を頼りとしていた右翼に対抗して左翼のものであったと言ってもさしつかえないだろう。ブーランジェ運動以来、この項が一部、逆転する。農民が共和体制に同盟するのに対し、ブルジョワと中流階級は、このシャッセ・クロワゼ *chassé-croisé* と対称をなす図形を素描することになる。パリが一見それとわかるくらいに左から右へと移行するのは、このときである。1830年、1848年、[1870年] 9月4日の蜂起と1848年6月の街頭戦とを間にはさんで、1792年8月10日のコミューン蜂起から1871年3月18日のそれまで不断に続いたあの伝統は、1900年のパリ市議会の更新の際に右翼勝利で終わりを告げるのである⁶³⁾。」アンドレ・ブルトンが1922年に出版された『失われた足跡』の中の「侮蔑的告白」において、さらに、1928年に出版された『ナジャ』において、街頭での、アナーキストの革命の予感を孕んだ無意識の解放を主張するの⁶⁴⁾、パリの街頭が経験した政治勢力の主導権交代を背景にしている。パリ市議会⁶⁵⁾での右翼勢力の拡大の時期とは少しずれて、政権のレベルでは、右翼は《1876年から1919年の間、恒久的な反対党の憐れむべき境遇にはば不断に陥っていたのにひきかえ、1919年[第一次大戦後初の総選挙での、下院の右翼のブロック・ナショナル *Bloc national* の大勝利]から1939年の間には、20年のうち14年間、政権を維持することになる⁶⁶⁾。》ドレフュス事件とともに生まれたアクション・フランセーズの綱領とも言うべきものは、モーラスの『君主制についてのアンケート』に記されているように、《伝統的、世襲的 *héréditaire*、反議会的、そして地方分権的君主制》の復活であることはよく知られている。時代錯誤の極みとも言えるこのような理念を標榜する日刊紙『アクション・フランセーズ』創刊についてウェーバーは述べている。「1908年春の、とある日、正午ころ、パリの下院議員モーリス・バレスとアンリ・マシスは、パリの中央市場に沿って歩いていたとき、真新しい広告におおわれた壁を見た。《アクション・フランセーズ、とその広告は宣言していた、総括的ナショナリズム *nationalisme intégral* の日刊機関紙。》バレスは肩をすくめた、《たわけた企てだね、と彼は言った、6ヶ月も続くまい!》」ところが、バレスの予断とは裏腹に、『アクション・フランセーズ』紙は1908年3月から1944年夏まで⁶⁷⁾生き延びる。シャルル・モーラスが《王党派の、伝統的教説》を、ジャック・バンヴィルが《外交政策》を担当し、レオン・ドーデは《論争家》の役割を演じる⁶⁸⁾。民主主義の理念を政治制度として実現してゆく第3共和制は、その憲法制定の過程で、共和制という体制自体を歴史から超越した絶対不可侵のものへと確立する動きを見せる⁶⁹⁾。しかしながら、共和派のこうした努力にもかかわらず、実際の政権は、周知のように、極めて不安定であった。それを端的に示すのが、内閣の交代であって、たとえば、1875年2月24日から1922年12月30日までの間に、58の内閣が入れ代わっている⁷⁰⁾。内閣のめまぐるしい交代劇は、アクション・フランセーズにしてみれば、普通選挙に基づく議会制民主主義そのものが孕んでいる権力基盤のもろさ以外の何ものでもない。『君主制についてのアンケート』の作者にとっては、これは君主制復活の必要性を盲信させる願ってもない材料であった。この大義実現のためには殺人も爆弾使用も辞さないと言った⁷¹⁾モーラスが果たして言論の人であるだけでなく真の行動家でもあったかどうかは後

で見ることにして、第3共和制政府の方からこの王党派の大立者に格好の非難材料を提供する破目におちいったことは否めない。ドレフュス事件しかり、ファショダ事件しかり、タンジール事件、アガディール事件等々。しかし、問題なのは、これらの事件を解釈するモーラス流実証主義の事実概念そのものである。たとえば、モーラスは1898年のファショダ事件と1905年のタンジール事件を取りあげる。前者について、彼は、4年間の反イギリス政策の中で政府がフランス海軍の整備を怠ったまま事件に突入したという事実を衝く⁷²⁾。後者の場合も同様である。ファショダ事件の再現であって、1898年のときには、フランスは当然増強しておくべきであった海軍よりも陸軍を増強していたのに対し、1905年のときには、逆に、当然増強しておくべきであった陸軍よりも海軍を増強していたという事実を衝く⁷³⁾。しかも、彼は、この2つの事件に際して政府がいずれも、議会で審議を重ねるでもなく、報道を通して事前に世論の賛同を得るでもなく、要するに、議会制民主主義を政府自ら踏みじっていたと指弾するのである。そして、1904年12月10日に行われた例のガブリエル・シヴトンの葬式の折に、ある伯爵が言ったことを予言として引用する。《われわれは君主制なしに君主制政治をしている⁷⁴⁾。》この論法は当然のことながら、フランスは君主制を必要としているというモーラスの確信を言外に語っている。《外交がわれらの共和制国家には禁じられているというのは一般的真理である⁷⁵⁾。》第3共和制にとっては触れられたくないような事実を惜し気もなく指摘することによって共和制の欠陥を暴くモーラスは、予想される通り、こと君主制となると、そうした否定的な事実を提示することに熱心ではない。事実の提示が一方では否定性の契機となり、他方では肯定性の契機となる。君主制という前提自体が批判の仮借ない弁証法にさらされることはなく、それは温存されたままである。『キールとタンジール』や『君主制についてのアンケート』を読んでモーラスの論理構成に一本調子のうぬぼれを見てとらないことは不可能にちがいない。注目すべきことに、このようなモーラスのご都合主義が『君主制についてのアンケート』の中で議論の対象となっている。反フリー・メーソンのキャンペーンで有名であったコパン・アルバンセッリは、モーラスが君主制のいい面だけをもっぱら示していることに不満を述べる。《大胆にもその悪い面——というのも、人間的なものの一切にそういう面があるのと同じように、君主制にも悪い面があるからです——を示して下さい、そしてそれと同時に、調和のとれた仕方では結合されているあなたの体系[君主制理念]が自分自身の弊害をどのようにして防ぐのかをわたしたちに見せて下さい⁷⁶⁾。》モーラスは、この核心を衝いた問題提起に対して、たとえば、来たるべき君主制の下で貴族の中に《変質者》dégénérés——ユダヤ人攻撃に使われたあの言葉である——が出れば、それを取り除くことが自然の理法にかなっているとそっけなく答え、この問題についてはリュール・サリュス伯がインタビューで《明晰に説明した》のを参照せよとお茶をにごす⁷⁷⁾。伯のインタビュー発言は、何のことはない、良い血筋の貴族は良いが、悪いのは困る、従って、良い貴族の血を維持するのが大切だ、といったような三百代言である⁷⁸⁾。では、モーラスが王について語れば……。『王も確かにその真の利害＝関心について間違っていることがあ

るだろう(というのも、王も人間であるから)。しかし、この誤ちは、いかなる政治的誤ちもそうであるように、ある見込み違いを招くだろうが、経験が何の役にも立ち得ない現下の体制と違って、この不幸は利するところがあるだろうし、是正、対応＝反動、そして改革を決定するだろう。この分析を支える事例が必要というのであれば、スダン以来のフランス共和制の政治とイエーナ以来のプロイセン君主制の政治を比較してみたまえ。そしてまた、政治的教訓として、ドレフェス事件の恐るべき無益性を評定してみたまえ。この事件が君主制下でも見事起きたと仮定したとしても、君主制であればそれを利用していただろう⁷⁹⁾。《王も人間である》とは、よくぞ言ったものである。現人神などと言わないところが、ルイ16世の首をはねたフランスならではの王党派作家の面目かもしれない。それはともかく、モーラスの議論の低劣さに目をおおいたくなるのはわれわれだけであろうか。彼の予定調和的思考の極めつけが次のような断言である。「世襲される王権は君臨する王と国民の利害＝関心とを同一のものとする。王も間違ふことがある、しかし、彼は、決して間違わないように、そして、誤ちを犯したら、それに気づいて、もっともすみやかにその誤ちを改めるようにと、他の誰よりも多くの利害＝関心を持っている。ルイ11世のようにたとえ不誠実な人間であっても、王は、自分自身の利害＝関心に奉仕するとき、臣民の利害＝関心に奉仕しているのである。これとは逆に、各自の知的あるいは道徳的価値が何であれ、選挙で選ばれた大統領とその大臣たちの心の中ではこの2つの利害＝関心があまりに安々と2つ別々になるということを見てとらない者がいるだろうか⁸⁰⁾？」モーラスの予定調和的思考と素朴実証主義とは表裏の関係をなす。

1789年の革命の遺産を確保しようとする共和派の歴史像に対抗して世襲君主制下のフランスこそ真正なフランスであるとするアクション・フランセーズは、当然、第3共和政体を祖国と同一視しない。その典型がモーラスの主張する《4つの国家》論である。すなわち、《ユダヤ人の国家》、《外国人 *métèque* の国家》、《プロテスタントの国家》、《フリー＝メーソンの国家⁸¹⁾》をいう。第3共和制にとってアクション・フランセーズは、アンシアン・レジームを復活させようとする反革命勢力として、《寄生虫》であったろうが、逆に、ドリュモンの《フランスをフランス人の手に⁸²⁾》というスローガンに鼓舞されたかのようにカペー朝以来の40人の王たちの《作品》であるフランスを夢見るこの極右にとって、《4つの国家》から構成されているとみなされた第3共和制は《寄生虫》と映ったにちがいない。このとき、第3共和制下でのアクション・フランセーズの抬頭は、言わば、フランスの国家理念をめぐる《寄生虫》同志の政治闘争を意味する。1931年のアンビギュ座での興行を機縁に左右両翼の乱闘騒ぎが街頭でくり広げられたとき、パリ警視總監シアップは3月4日上演禁止を言い渡す。それを受けてレオン・ドーデは自分の新聞において勝利宣言をする。「またしても、おぞましいこの体制は、フランスを殺しかねず、われわれが倒すと誓ったこの体制は敗北を認めた。理性の力でもあるあの力[アクション・フランセーズ]を前にして屈したのである⁸³⁾。」世襲君主制の復活を大義名分にかかげる作家にしてみれば、裏切り者と中傷されたドレ

フュスを扱った戯曲の上演に対して、たとえいかに下卑た暴力行為に訴えても、それは由緒正しい『理性の力』の発露なのかもしれない。『固定観念』はアルフォンスを父に持つレオン・ドーデと接触することになるだろう……。

第2章 梅毒とユトレヒト条約

すでに述べておいたように、『梅毒のヨーロッパへの導入はユトレヒト条約より、もう少し重要である』という定式は政治的事件だけが歴史(学)の対象ではない筈だとする、実証主義歴史学への批判であった⁸⁴⁾。梅毒は当時、まさしく人々に《とり憑い》ていた。対話の文脈からしても、梅毒とユトレヒト条約の比較は、それぞれ、範列の一例として、新しい歴史学と古い歴史学とを比較したものであると考えるのが一番、妥当なことのようと思われる。しかし、……。

ユトレヒト条約(1713年)はスペイン継承戦争(1700-14年)の終結を飾る条約のひとつであることは周知のところだろう。継承戦争の発端となったのは、スペイン・ハプスブルク朝の最後の王⁸⁵⁾カルロス2世の死であった。カルロス2世は虚弱な体質であったが、父君のフェリーペ4世は梅毒にかかっていた⁸⁶⁾。戦争の結果、ルイ14世の孫アンジュー公がフェリーペ5世としてスペイン・ブルボン朝を興す⁸⁷⁾。スペイン・ブルボン朝は途中で断絶があるとは言え⁸⁸⁾、『固定観念』の出版される1年前、1931年4月14日にアルフォンソ13世がスペイン・ブルボン朝最後の王としてマルセイユに(さらに、ロンドンに)亡命するまで続いている⁸⁹⁾。この王朝は第3共和制成立と無縁ではない。アクション・フランセーズに属してモーラスの『組織的経験論』empirisme organisateur[モーラス流実証主義]に依拠した歴史家⁹⁰⁾ジャック・バンヴィルは次のように言う。

「1868年、革命が[スペイン・ブルボン朝の]女王イサベル[2世]を倒し、プリム元帥は、イサベル2世の代わりに、ビスマルクと謀って、ホーエンツォレルン家のカトリックを奉ずる分家出身のレオポルト大公に王位を提供していた。フランスは、かつてルイ14世の下で、ハプスブルク家[出身のスペイン王位請求者カール⁹¹⁾]を承認しなかったように、プロイセン王の親族がスペインを治めるのを承認できなかった。1700年に口にされていたことが、そのころ、再び口にされた。すなわち、カール5世 Charles-Quint の帝国が再び建設されてはならない、と。[フランスの]世論は、すでにプロイセンに反対の声をあげていたので、ホーエンツォレルン家による王位継承擁立にビスマルクの挑戦を見た。プレヴォー・パラドルは、フランスとプロイセンが同じレールの上を疾駆する2つの機関車のように、お互い衝突するよう歩んでいると書いていた⁹²⁾。」レオポルト擁立は、結局、その父によって取り下げられる。しかし、フランスは1864年にレオポルトの弟の兄弟がルーマニア王としてその既成事実を作っていたことを反省して、ヴィルヘルム1世からスペインに干渉しないとの保証を取りつけるため、駐プロイセン大使ベネデッティをその任につかせ

る。これが有名な、ビスマルクのエムス電文事件となり、1870年7月19日、普仏戦争が布告されるのである⁹³⁾。だが、ユトレヒト条約の歴史的意味はこれに尽きるのではない。言い換えれば、第3共和制下の政治風土の一端を垣間見させてくれるような条約の効力が問題なのである。アクション・フランセーズに所属し、レオン・ドーデによれば、《判事精神とともに弁論家と弁護士の二つの才能⁹⁴⁾》を持つマリー・ド・ルーを引用＝召喚しなくてはならないのは、ここである。

1713年のユトレヒト条約に接近するには16世紀末までさかのぼる必要がある。アンリ4世の王権獲得に際してパリ高等法院は1593年6月28日にサリカ法裁定なるものを下し、この中で、女子による相続を認めないで長子相続を定めたサリカ法に加えて、フランスの王の資格として、カトリック教徒であることとフランス人であることが法文化される⁹⁵⁾。スペイン継承戦争のとき、孫のアンジュー公をスペイン王フェリーペ5世として擁立したルイ14世が1700年の開封勅書において、新王にフランス人のままでいるようにと言ったのは、このサリカ法裁定に依拠して、スペイン王であると同時に、フランス王位継承権をも確保しておくためであった。しかし、ユトレヒト条約において、ヨーロッパの他の王室は勢力均衡の破綻を懸念して、フェリーペ5世がフランス王位継承権を放棄する（これは自動的に、フランス人ではなくなることを意味する）という条件で、同王をスペイン王として承認する。その結果、フェリーペ5世は王位継承権を放棄して正式にスペイン王となる。ルイ14世も1713年の開封勅書で1700年のそれを廃棄し、フェリーペ5世の王位継承権放棄を認める⁹⁶⁾。ここまでがユトレヒト条約の背景と内容である。以下は、その後史である。「ユトレヒト条約の本質的条件として、[スペインとフランス]両国の王冠のこのような分離があった。ユトレヒト条約はわれわれみなを結びつけていると、バルムのロベール公は、シャンボール伯の死の翌日、マン伯に言ったものである。この条約の基礎である[フランス王位継承権]放棄は、単に今でも[1929年]有効であるばかりでなく、サリカ法に反するどころか、その法の精神を満たしてもいた。フェリーペ5世の子孫は、その親ももはや持っていないフランス国籍を今まで再び取得したことがない。この前の戦争[第1次大戦]はこの真理を明白な仕方でも証明したのであって、フェリーペ5世の子孫の中には中央[ヨーロッパの]帝国への奉公のため武器を取った者もいた。彼らは裏切り者ではなくて、敵の臣下にすぎなかったのである。逆に、[フェリーペ5世の子孫の]多くは、まず第一にスペイン王は、自分たちのフランス人としての出自に対する感情と誇りを非常に生き生きとした形で保持してきた。フランスはそれを利用してきたのである。しかし、フランスの友人であることとフランス人であることは、全く別の事柄である。フランス王家はカペー家の血が流れているフランス人の君主からでしか成り立たない。そういう君主だけがフランスに対する義務を持っているのであり、王権はこの義務がなければ思いつくこともできない。シャンボール伯の死によってパリ伯がフランス王家の首長になったのは、このような事情によってである⁹⁷⁾。」要するに、1713年のユトレヒト条約が第3共和制においても意味を持つのは、1593年のサリカ法裁定とともにスペイン・ブルボン家を除外することによって、フランス王位請

求者の結束を固めていたという点にある⁹⁸⁾。1883年8月24日シャンボール伯が《53年間の亡命の果てに、オーストリアの城》で亡くなる。《奇蹟の子》と呼ばれた正統ブルボン家の長は、《一度も治めたことがなかったとは言え》、《君主制の千年に渡る連続性の象徴》であった。この亡命者が子孫のないまま死去し正統ブルボン家の血統が絶えたことは、《古い君主制の終焉、古フランスの消滅を刻印する。》それに追い討ちをかけるかのように、1886年に追放令が定められ、《かつてフランスを治めた諸王家の首長》が《国土》から退去する⁹⁹⁾。ロンドンに亡命していたオルレアン公フィリップ8世は、他の王位請求者たちとともに、当時、《ニッケルめっきを施された足》Pieds nickelés と揶揄されていた。オルレアン公は、《ロンドンで商売の特別な才覚を持っているので》《Croquignole》とあだ名されていたが、何故、《Pieds nickelés》と茶化されたかと言え、この語句が、《世紀末のバリの隠語》で《もはや、ぐるになりたくない》ne plus vouloir marcher dans une combine という意味であったからである¹⁰⁰⁾。つまりは、祖国フランスに王として帰還するという大義を忘れて瑣事にうつつをぬかしているというわけだ。レオン・ドーデがモーラスによって1904年ロンドンに派遣され、意気揚々と、《王党派の中でも最も君主制擁護者》となって帰ってくるのが、このオルレアン公との会見であった。ドーデは誇らしげに言っている、「もしもあのときオルレアン公が私に窓から飛び降りてみたまえと言っていたら、私はただちに飛び降りていただろう¹⁰¹⁾。」（公は残念なことをしたものであるなどと言ってはならない。）彼は反ユダヤ主義者の経歴を1889年にドリュモンによって創設された反ユダヤ主義同盟に最初から参加したことで開始する¹⁰²⁾。10年後の1899年2月22日にオルレアン公の《サン・レモ宣言》が発表される。破棄院がドレフュス裁判再審請求の受理を発表して4ヶ月後のことである。この宣言は《ユダヤ人問題》が存在することをフランス人に警告したものであった¹⁰³⁾。ドーデは、後年の回想で次のように述べている。「この宣言が私のなかでどんなにとてつもない反響を残してきたかということに私がやっと気づいたのは、ある強烈な情動の遠い起源が記憶の奥底において再び見出せるように、ずっと後になってから、ひとたびアクション・フランセーズに参加してからのことであった。事実、私を王党派にしたのは、というかむしろ、南仏生まれのわが先祖たちの由来する王党派としての琴線を私のなかで目覚めさせたのは、この談話である。ヴォージョワの炎となって燃えさかる会話とモーラスの光輝く著作の中に政治的真理を私に再び見出すことを許したのは、この談話なのである¹⁰⁴⁾。」しかしながら、アクション・フランセーズを王位請求者の指揮下にすっぽり組み込まれた従順な下部組織とみなすならば、それは大きな間違いをおかすことになる。それどころか、この新右翼は、王位請求者の取巻きを介してオルレアン公やその次のギーズ公と軋轢をひきおこしているのである¹⁰⁵⁾。アクション・フランセーズの会員は誰ひとりとして古典的な王党派運動に参加した経験を持ちあわせていない¹⁰⁶⁾。左翼新聞によれば、アクション・フランセーズは王政主義の極左に位置していたのであって、旧右翼にとっては《王政主義に左翼ができよう》などとは思ってもよらなかったことである¹⁰⁷⁾。

『固定観念』のヴァレリーが《[Liberté], Égalité, Fraternité》に対して《Intensité, brièveté, rareté》と付けることによって第3共和制＝社会体とオルガスム＝個人の身体を接続し、《sexualitéの社会》における《生（命）—権力》の力線をなぞっているとすれば、同じ共和制原理に《Vanité, Hérédité, Fatalité》を対置したレオン・ドーデは、当の《世襲＝遺伝》Héréditéへの備給＝投資 investissement を通してこの力線をおどましい形でなぞっている。それは、ユトレヒト条約に劣らず、あるいはそれ以上に、梅毒に関わる。レオン・ドーデが生まれた1867年より6年前のことである。レオンの父となるアルフォンスは1861年、ナポレオン3世の妃ウージェニーのテュイルリ宮に招かれる。「皇妃の側近で朗読系の女官のひとり、息を呑むほどに美しいこの青年[アルフォンス]に魅惑される。ことは決着した。アルフォンスは、こんなに高い位にある婦人を性的に満喫させるのに嬉しいあまり、彼女に名前をきくのを忘れる。数ヶ月後に、彼は、娼婦たちからでさえ今までにかかったことのない性病のひとつをこの美しい婦人からうつされた証拠を苦痛のうちに知ることになる。[……]それから、この社交界特有の瘡＝梅毒の痕跡は消える。それにひきかえ、彼は喉と胸の痛みを感じる¹⁰⁸⁾。」以後、アルフォンスは梅毒性進行麻痺の諸症状に終生、苦しめられることになるだろう。レオンが医学の道を一度は志した(1885年から1892年まで¹⁰⁹⁾)のは、このような家庭の悲劇を目のあたりにしていたこととも関係する¹¹⁰⁾。父親の病気は息子のなかでフォンタスムとなって残響し、その結果、レオンは医学をあきらめジャーナリズムの世界へ、駆りたてられるようにして飛び込む。その先鞭が1894年の『死の栽培者たち』であった。アルフォンスの友人で主治医の一人でもあったシャルコー、小説家に《シャルコー風豚肉加工業＝治療法 Charcoterie¹¹¹⁾》を施したシャルコー、自分がインターン試験に落ちたのも、わが娘との結婚をことわられた父親がそれを根に持って仕返ししたせいだと、レオンによって邪推された¹¹²⁾シャルコーを作中人物に仕立てて医学界の腐敗堕落をラブレー風に告発した書である。

『固定観念』の《私》は、《わたしたちはみな[梅毒トレポネーマなる]小さな青白い人物にとり憑かれています》と言っていたが、パンタグリュエルに喜々としてなりすました《太っちょレオン》¹¹³⁾は、まさに、この《小さな青白い人物にとり憑かれ》ていた。レオンは《本性からして伝統主義者であり、彼の父のように反議会的であり、ミストラルのように地方分権論者である。遺伝的＝世襲的 héréditaire 性格についてはどうかと言えば、この概念が梅毒から近親結婚に至るまで、いかにドーデ家につきまといっているかは、十分知られている¹¹⁴⁾。》モーラスの《伝統的、世襲＝遺伝的 héréditaire、反議会的そして地方分権的君主制》を信奉するレオンは第3共和制にとって遺伝(世襲)的敵＝宿敵 ennemie héréditaire であったが、その彼にとっては、梅毒性進行麻痺に苦しめられている小説家を父に持ち、妻のマルトから《権力の世襲(遺伝) hérédité du pouvoir》に基づいた君主制理念を啓示される¹¹⁵⁾レオンにとっては、《遺伝(世襲)的宿命性の理論》¹¹⁶⁾は ennemie héréditaire に他ならない。あたかも、奇蹟を行う王の遠い伝説に逢着したかのように！あたかも、権力の世襲(遺伝)による君主制を大義として信じるのが梅毒の遺伝(世襲)から癒され

ることであるかのように！クレベールはものの見事にドーデの急所を衝いている。「この4年[第1次大戦]の間、戦争はドーデに、もうひとつ別の内部の敵、そのうちの第1の内部（国内）の敵であるドイツ系ユダヤ人のスパイ[レオンの反ユダヤ主義キャンペーンをいう]は恐らくその亡霊のような投影でしかない内部の敵、のことを忘れさせはしなかった。その敵とは、恐れていた癌のように彼を蝕んでいる病気、すなわち、遺伝（世襲）的欠陥、リングの中の幼虫のようにいかにもフランス的な家族を腐敗させかねない、あの先天性梅毒 *hérédosyphilis* である。子供の頃からというもの、ドーデはこの潜在的脅威につきまといわれ、この脅威をはね返し、抑圧し、少なくともその悪魔ばらいをする手段を止むことなく探していた¹¹⁷⁾。」『先天性梅毒』*L'Hérédosyphilis* (1917年出版)と『心像の世界』*Le Monde des Images* (1919年出版)を読むと、レオンの悲愴なまでの悪魔ばらいの叫びを聞くことになるだろう。だが、『アクション・フランセーズ』紙に陣取ったジャーナリズムの文章は、レオンのいかがわしさを暴露している。「ドイツ系ユダヤ人のスパイに関する自分の記事をそっくり『大戦前』という題で出版することによって、ドーデは一石二鳥の手を勝ちとる。彼は[第1次大]戦を予見した最初の人であったとみなされることになるだろうし、本の売れゆきでとてつもない成功をおさめることになるだろう。告発された会社からの召喚状が、証拠不足で彼の負けとなる訴訟が、彼の使った資料の誤りに関する新事実の発見が、そして、彼の方法によって衝撃をうけた人たちの抗議が雨あられと降ろうとも、彼には知ったことではない。ひとからどう非難されようとも、[彼の]猜疑心はファントマの影のように滑翔し続ける。会社社長、銀行家、実業家の中には辞職する破目になる者も出る。『アクション・フランセーズ』紙は、万事を自分の面前で汚らしいものと清潔なものに掃き分けて要らなくなったものを処分する肅清をでっちあげたのである¹¹⁸⁾。」

アクション・フランセーズと医学界とは親密な関係にあった。レオン・ドーデの縁故、職業柄から来る《権威的性向》、《ユダヤ人医師の殺到》などが原因で《パリと地方の医学部教授の多くが[アクション・フランセーズ]同盟の会合の折に、署名欄に、選挙の折にでさえ、スターのように目立っていた。》1927年、アクション・フランセーズは医者との結束を固めるため、雑誌『医者』を発刊し、定期饗宴を主催する。この定期饗宴には、ナショナリストの医者たちが（ストラスブールで40人、アランソンで15人、トゥルーズとボルドーで100人ずつ、リヨンとマルセイユで200人ずつ。パリでは1931年に300人、1932年には700人、1935年にはその2倍以上）参加していた¹¹⁹⁾。ヴァレリーが『固定観念』を《医師団》に差し向けていたことをここで思い出す必要がある。《医者》が、例のパリでのあわただしい生活に追いまくられながらも、日課となった用事以外に、固定観念にとり憑かれるのはどうしたわけかと尋ねると、《私》は、《それは病的 *morbide* ですね》と答えたにすぎないにもかかわらず、《医者》は突拍子もない声でいさめるかのように言う¹²⁰⁾。

D 《いいですか、医学用語偏重 *verbalisme médical* は止めなさい。》

M 《すいません。この甘美で肥沃な方言ほど、ものの色を移らせる＝影響を与える *déteint* ものはありません。ひとはこの方言を茶化したり、時にはその猿真似をしたりします……。でも、私の言うことを信じて下さい、モリエールとかラブレーとかにおいてさえ、語の自由な発明が認められており、全くの奇想が、言わば、基礎的 *basale* で体質的 *constitutionnel* になっている言語に対して、文学者の抱く、あの、秘やかで、ねたみ深い賛嘆の念が見抜かれるわけです。》

D 《ほら吹き！……。[……]》(pp. 77-8)

『固定観念』と同時代に『医学用語偏重』と批判されてしかるべき文学者の名を挙げるとすれば、その中に、アンドレ・ブルトンとレオン・ドーデを抜かすわけにはゆくまい。前者については、精神医学を途中で断念して、レオンと同様、文学に走ると、フロイトの無意識概念に触発された自動書記を案出し、1928年に『ヒステリー-50周年1878-1928』と題して『19世紀末の最も偉大な詩的発見¹²¹⁾』であるヒステリーを祝い、『ナジャ』でスキャンダルを起こし、1930年には、エリュアールと共著で『無原罪の懐胎』を出版して様々な精神疾患をテキスト化したブルトンが思い出されるだろう¹²²⁾。レオン・ドーデについてはどうかと言えば、彼は『言語表現の点からだけでなく、様子の点から言っても、ラブレー的¹²³⁾』であったが、彼の『医学上の隠語』に対する執着はつとに有名である¹²⁴⁾。「文学においては、典型的先天性梅毒患者は、思考の力に対する言語的自在さ *facilité verbale* の明らかな優位によって特徴づけられる¹²⁵⁾』と言ったのはドーデ自身であった。序論で指摘したように、ヴァレリーの歴史(学)批判は、認識論的批判——たとえ、その基礎が彼自身の言葉を使えば『恣意的なもの』であるにせよ——であると同時に、プロパガンダの政治的道具と化した歴史への批判でもあった。『現代世界の考察』(1931年)の前言の中で、彼は、自然科学の進歩にひきかえ、『歴史的-政治的領域においては、情念的＝受動的考察と無秩序な観察＝観測の状態のままである』現状を指摘して次のようにつづける。「精密器具に比較できる思考の器具として物理学あるいは生物学を考えることのできる同じ個人が、政治のこととなると、不純な用語、変化する概念、虚妄な隠喩などを使ってそれを考える¹²⁶⁾。」この『同じ個人』とは誰か？それはレオン・ドーデに他なるまい。レオンが物理学を語ればどうなるか？『固定観念』の『私』は、『2年前、アインシュタインがごく最近の自分の研究について2つの講演をしにパリにやって来ました』(p. 149)と言っている。1929年のパリ講演のことである。ところで、アインシュタインはそれ以前にも、パリ講演を行っている。プロカ Broca とシャルコーの言語中枢局在論が19世紀後半から20世紀初頭にかけてもてはやされたのと同じくらいに、アインシュタインの理論が評判をとった¹²⁷⁾とレオンが言う、1922年のパリ講演である。『王党派の日報紙『アクション・フランセーズ』の主筆であり、有名な反ユダヤ主義者であったレオン・ドーデは、2日前にはアインシュタインに対して猛烈に反ユダヤ的な論説を書いていたが、3月30日には皮肉を捨て、認識論の面で非常

に興味深い一連の問題を提起した。彼はアインシュタイン主義の中に「科学の地崩れ」現象を見た。そこで明らかになっているのは、科学の破産ではなく、19世紀に特有の「限りない科学の進歩という神聖不可侵の教義」の破産であった¹²⁸⁾。」このバリ講演は《2つの矛盾した帰結》をもたらした。一方では、相対論は一般になじみやすい形で流布されなかったが、他方では、それにもかかわらず、というか、そうであるからこそ、《公衆と新聞による相対論の知覚に、政治的、イデオロギー的、そして人種の次元》が導入されたのである¹²⁹⁾。

次に、生物学を語るレオンとは？たとえば、『生きられたバリ』Paris vécu (1929年)の中で、彼は、それまでの《反ユダヤ主義を脱した》、《さまよえる人種の問題は客観的に、単に科学的な形式の下で私に課された》と言っていた。これは、うわべだけの変化にすぎない。1933年、ドイツにおいてユダヤ人が迫害される状況下、ユダヤ人問題と題する講演のひとつで、レオンはシャルコーのユダヤ人観を引き合いに出し、次のようにうそぶく。「民主主義は、ユダヤ人という細菌 *microbe juif* を病原性のある *pathogène* そして毒性のあるものにする環境 *milieu* であって、この細菌は、民主主義がなかったら、無害のまま、あるいは、それにほとんど準じるようなままにとどまっていたことだろう……(。)イスラエルの民という酵素＝誘因 *ferment israélite* は、病原性のない寄生菌 *saprophytique* である、すなわち、それは諸国民(国家)という有機体 *organisme des nations* の中を定着することなくさまよっているが、政治的状况しだいで毒性を持ち、有害となりうる。王の帰還だけがユダヤ人を消毒し *désenvenimer la juiverie*、彼らを国民の目的のために利用することができる……¹³⁰⁾。」ドーデは一体どこまで生物学あるいは医学の《虚妄な隠喩》を駆使すれば気がすむのだろうか。《王[ギーズ公]の帰還》によって世襲(遺伝)君主制が晴れて復活したあかつきには、かつてロンドンのオルレアン公を《祖国の病＝悪 *maux* に対する唯一の治療薬、世襲(遺伝)的な、試験済みの、議論する余地のない治療薬¹³¹⁾》と形容したレオンは自分も遺伝(世襲)性梅毒の亡霊から解放されるとも言いたいのだろうか。それと同時に、フランス社会に変質 *dégénérescence* をもたらす張本人と左右両翼から誹謗され、《寄生虫》呼ばわりされたユダヤ人も社会の健全な構成員に生まれ変わるとも言いたいのだろうか。もちろん、歴史はそういう方向には進まなかった。梅毒はペイルの進行麻痺論を通してモレル——ドーデは、ハンガリー系ユダヤ人のマックス・ノルダウ(その『変質論』で変質者 *dégénéré* という言葉を広めるのにもっとも直接的な貢献をし、後にナチスに利用されることになるジャーナリスト¹³²⁾)を《ルーアンのモレルの剽窃家¹³³⁾》と呼んでいる——の変質概念に《接木》された。その変質概念は、18世紀末に狂気の可能性と密接に関連するとみなされた環境 *milieu* 概念によっても構成されていた¹³⁴⁾。レオン・ドーデが《民主主義は……環境である》と言った、あの《環境》である。さらに、変質論は19世紀後半の《sexe のテクノロジー》における《2大刷新》、すなわち、《性倒錯の医学》と《優生学の綱領》を橋渡しする役目を果たし、《性倒錯—遺伝—変質》理論に結実する。その極限にはナチスの人種主義政策が口を開けて待っている¹³⁵⁾。ドーデは、この性倒錯—遺伝—変質論の系譜をさかの

ばっているのである。彼が1929年に《反ユダヤ主義を脱》して、ユダヤ人問題を《単に科学的な形式の下》で考えると言うとき、それは実際には、彼が反ユダヤ主義の方へさらに一歩踏み込んだということに等しい。なぜなら、《科学的な形式の下》で考えられたユダヤ人問題がナチス優生学においてどのような運命をたどったかを知らぬ者はいないだろうからである。1929年以前と1933年とでは、ドーデの反ユダヤ主義は激しさの度合いに違いがあるだけで、その本質においては全然変わっていないのだ。ドーデは1915年にこう言っている。「私見によれば、この父[ドーデ自身が《当代の、そしてたぶんあらゆる時代にわたって第1級の梅毒学者》と呼んだアルフレッド・フールニエ]とこの息子[エドモン・フールニエ]は、40年にもわたる経験に基づいて自分たちの考察を立証し書類を仕あげることによって、もっとも重要でもっとも強力な鍵のひとつを人類に与えたのである。すべての鍵がこの鍵で開くのではないとすれば、その4分の3がこれで開くのは、まちがいない。恐ろしい病=悪をもたらす細菌 *microbe*、名指しで呼ばなければならないので言うと、[梅毒]トレポネーマは、進行麻痺、癆 *tabes*、そしてほとんどすべての変質 *dégénérescences* の鞭 *fouet* であるばかりでなく、天才と才能の、ヒロイズムと才機の鞭でもある。脳細胞と同様に骨髓細胞をも興奮させたり、刺激したりすることによって、あるときはそれらを鈍らせたり麻痺させたりすることによって、それらに穴をあけたり悩ませたりすることによって、充血、マニー、出血、大発見、そして硬化症 *scléroses* の主人である遺伝(世襲)性トレポネーマは、梅毒にかかった家族同志の異種交配 *croisements* によって強められ、古代の運命 *fatum* の役割に比すべき役割を演じだし、演じているし、これからも演じることだろう。それは、目には見えないが現にそこにいる人物 *personnage* [cf. 『固定観念』の《小さな青白い人物》]であって、この人物がロマン派や精神不安定者 *déséquilibrés*、崇高な様子をした常規逸脱者 *aberrants*、衛学的あるいは暴力的な革命家をつき動かしているのである¹³⁶⁾。」梅毒トレポネーマのポジティブな面は——《天才》とか《ヒロイズム》とか——さておき、そのネガティブな面、《進行麻痺》、《癆》、《ほとんどすべての変質》こそドーデをとらえて離さない。遺伝性梅毒による変質という強迫観念に蝕ばれた作家が目前の、変質をフランス社会にもたらすとされたユダヤ人を攻撃するとき、投影機制がこれほど見事に、これ程おどましく暴露されたことがかつてあったかどうか詳らではない。

《sexualité 装置》にからめとられた第3共和制下のパリにおいて、ユトレヒト条約=フランス王位請求者=世襲よりも、梅毒=レオン・ドーデ=遺伝の方が、《もう少し》どころか、はるかに《重要》なのである。第2部では、大衆民主主義下のパリの街頭とヴァレリーの権力=権能志向とが問題となるだろう。

註

当論文は本誌『仏文研究』第20号に発表した《Paris Parasite Parodie ——『固定観念』のフォルムを読む(続編)——》の序論に対して本体の一部に該当するものであるが、第3共和制の政治的歴史過程を考察しているという意味で、独立した論稿でもあるように意図されている。

- 1) Léon Daudet, *Au Temps de Judas*, Grasset, 1933, pp. 48–50.
- 2) Jean Cassou, *Sur le pouvoir*, in *Paul Valéry vivant*, Cahier du Sud, 1946, pp. 154–5.
- 3) Paul Valéry, *Œuvres II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1970, p. 700. PL.O.II.と略す。
- 4) Henri Mondor, *Propos familiers de Paul Valéry*, Grasset, 1957, p. 51.
- 5) Sergio Villani, *Gladiator et le césarisme de Valéry*, in *Paul Valéry 4, le pouvoir de l'esprit*, textes réunis par Huguette Laurenti, Minard, 1983, p. 69.
- 6) Paul Valéry, *Cahiers XV*, C.N.R.S. 1959, p. 291.以下の引用のときはXV–291と略し本文に送る。
- 7) Sergio Villani, art. cit. p. 74.
- 8) Paul Valéry, *Lettres à quelques-uns*, Gallimard, 1952, p. 95.なお、清水徹「ある対話について——マラルメとヴァレリー——」(1986年9月の『ユリイカ』マラルメ特集号所収。pp. 296–325)をも参照した。
- 9) Paul Valéry, *La Jeune Parque et poèmes en prose*, Gallimard, coll. 《Poésie》, 1974, p. 184.
- 10) Ned Bastet, *Genèse et affects : le Fragment II du Narcisse*, in *Ecriture et génétique textuelle, Valéry à l'oeuvre*, textes réunis par Jean Levaillant, Presses Universitaires de Lille, 1982, p. 101.
- 11) André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890–1942*, Gallimard, 1973, p. 197.
同書の訳書(二宮正之訳『ジッド=ヴァレリー往復書簡』I, 筑摩書房, 1986)をも参照した。
- 12) Henri Pastoureau, *Des Influences dans la poésie présurréaliste d'André Breton*, in *André Breton, essais et témoignages*, Baconnière, 1949, p. 146.
- 13) Marguerite Bonnet, *André Breton, Naissance de l'aventure surréaliste*, Corti, 1975, p. 109.
- 14) Paul Valéry, *L'Idée fixe*, Gallimard, coll. 《Idées》, 1966, pp. 140–1.
《M》と《D》はそれぞれ、Moi と le Docteur の略。
以下の引用ではページ数を本文に送ることにする。
- 15) Michel Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard, coll. 《Tel》, 1985, p. 535.
- 16) *ibid.*, p. 537.
- 17) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I, La Volonté de savoir*, Gallimard, 1988, p. 18.
- 18) *ibid.*, p. 45.
- 19) *ibid.*, p. 185.
- 20) *ibid.*, pp. 161–4.
- 21) *ibid.*, p. 163.
- 22) *ibid.*, p. 169.
- 23) *ibid.*, p. 194.
- 24) アンリ・エレンベルガー『無意識の発見』木村敏・中井久夫監訳, 引文堂, 1986, 上巻 p. 110.
- 25) Jean-Noël Marque, *Léon Daudet*, Fayard, 1971, p. 44.

- 26) Foucault, *Histoire de la sexualité I*, p. 177.
- 27) ibid., p. 64.
- 28) Baudelaire, *Œuvres complètes II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1976, p. 961.
- 29) Theodore Zeldin, *Histoire des passions françaises 1848–1945, I. Ambition et amour*, traduit de l'anglais par Paule Bolo et Denise Demoy, Seuil, coll. 《Points-Histoire》, 1980, pp. 354–5.
- 30) アンリ・バリユク『フランス精神医学の流れ』影山任佐訳。東京大学出版会, 1982, pp. 120–2.
- 31) Elisabeth Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France I*, Seuil, 1986, p. 208.
- 32) ミシェル・フーコー『同性愛と生存の美学』増田一夫訳, 哲学書房, 1987, p. 128.
- 33) 同書。p. 130.
- 34) *L’Affaire Barrès*, dossier préparé et présenté par Marguerite Bonnet, Corti, 1987, p. 68.
- 35) Roudinesco, op. cit. pp. 340–2.
- 36) André Breton, *Nadja*, Gallimard, 1958, p. 185. (cf. André Breton, *Œuvres complètes I*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1988, p. 740.)
- 37) André Breton, *Point du jour*, Gallimard, coll. 《Idées》, 1977, pp. 90–1.
- 38) 拙論「《Autre chose》あるいは《ex(–)pliquer》——『固定観念』のフォルムを読む——」(本誌『仏文研究』第18号所収) p. 157 参照。
- 39) Roudinesco, op. cit. p. 204.
- 40) 註の38で言及した拙論, pp. 145–7, p. 160 を参照。
- 41) Foucault, *Histoire de la sexualité I*, p. 157.
- 42) Roudinesco, op. cit. p. 428.
- 43) ibid., p. 429.
- 44) Pierre Mauriac, *M. Paul Valéry parmi les médecins*, La Presse Médicale, mercredi 19 octobre 1932.
- 45) フーコー『同性愛と生存の美学』, pp. 165–8.
- 46) ベルナル＝アンリ・レヴィ『フランス・イデオロギー』内田樹訳, 国文社, 1989, p. 128。この論旨で、われわれはヴァレリーが人種主義あるいは反ユダヤ主義を信奉したと断言するつもりは全くない。
- 47) Eugen Weber, *L’Action française*, traduit de l'anglais par Michel Chrestien Fayard, 1985, p. 333.
- 48) これは、対話の論理からすれば、《錯綜体》の、われわれの視点からすれば、フロイトの自由連想の一例となっている。《私》はこう言っている。《あなたは3分前に、わたしたちがファラオと強烈な政治の話をするようになるだろうということを見抜いていたとでも言うのですか?》(p. 121)
- 49) Michel Winock, *Edouard Drumont et Cie, antisémitisme et fascisme en France*, Seuil, 1982, p. 46.
Bernard＝Henri Lévy, *L’Idéologie française*, Grasset, 1981, p. 128. (内田樹訳『フランス・イデオロギー』p. 137)
- 50) Roudinesco, op. cit. p. 188.
- 51) ピエール・ミケル『ドレフュス事件』渡辺一民訳, 白水社クセジュ文庫, 1978, p. 38. Michael R. Marrus, *Les Juifs de France à l’époque de l’Affaire Dreyfus*, traduit de l'anglais par Micheline Legras, Complexe, 1958, pp. 193–226.
- 52) 註の38で言及した拙論, pp. 177–8 の註23を参照。
- 53) N. ヌウェット『パリ』小林正, 鈴木力衛共訳, 東大協組出版部, 1950, p. 15.
- 54) 『固定観念』のテキストの現在が1931年だとわかるのは、《2年前》のアインシュタインのパリ講演

(実際に1929年に行われた)が話題となるからである。

- 55) Claude Nicolet, *L'Idée républicaine en France, essai d'histoire critique*, Gallimard, 1982, p. 49.
- 56) *Les plus belles pages de Maurras*, Flammarion, 1931, p. 64.
- 57) Albert Thibaudet, *Les Idées de Charles Maurras*, NRF, 1920, p. 245.
- 58) *ibid.*, p. 86.
- 59) Léon Daudet, *Au temps de Judas*, p. 1 (ドーデが《根拠なしに当選無効となり》と言っているのは、実は、《根拠あり》であった。シヴトンは選挙キャンペーンで政府を激しく攻撃したからである。cf. G. Charensol, *L'Affaire Dreyfus et la Troisième République*, Kra, 1930, p. 186.)
- 60) *ibid.* pp. 217–251.
- 61) *ibid.* pp. 26–7.
- 62) Weber, *op. cit.* p. 333.
- 63) René Rémond, *Les Droites en France*, Aubier, 1987, p. 157.
- 64) 拙論(註の38を見よ), pp. 153–4.
- 65) 『固定観念』の《医者》は、パリ第20区から市議選に立候補した(P. 120)と言っているが、《医者》のモデルとされるパリの精神科医ルイ・ブールが実際に立候補したことがあるのかどうか、今のところ、わかっていない。
- 66) Rémond, *op. cit.* p. 182.
- 67) Weber, *op. cit.* p. 19.
- 68) Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République, tome IV, Cartel des Gauches et Union nationale*, PUF, 1973, p. 4.
- 69) Nicolet, *op. cit.* pp. 281–292.
- 70) Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République, tome III, L'Après-guerre*, PUF, 1968, p. 390.
- 71) Weber, *op. cit.* p. 48.
- 72) Charles Maurras, *Kiel et Tanger 1895–1905, La République française devant l'Europe 1905–1913–1921*, Nouvelle Librairie Nationale, 1921, p. 71.
- 73) *ibid.*, p. 73.
- 74) *ibid.*, p. 52.
- 75) *ibid.*, pp. 29–30.
- 76) Charles Maurras, *Enquête sur la Monarchie*, nouvelle édition, Nouvelle Librairie Nationale, 1911, p. 348.
- 77) *ibid.*, p. 350.
- 78) *ibid.*, p. 91.
- 79) *ibid.*, p. 353.
- 80) Maurras, *Kiel et Tanger*, p. 301.
- 81) Rémond, *op. cit.* p. 157.
- 82) レヴィ『フランス・イデオロギー』内田樹訳, p. 22の訳註37。
レオン・ドーデは1901年に *Le Pays des Parlementaires* を出版してこのスローガンを高らかにぶちあげている。cf. Marque, *op. cit.* p. 284.
- 83) Weber, *op. cit.* p. 333.
- 84) 現に、ヴァレリーは歴史について語るとき、梅毒とユトレヒト条約の組合せを他のところ(PL. O. II. p. 1545)でも使っている。
- 85) フアン・ソペーニャ『スペインを解く鍵』, 平凡社選書, 1986, p. 144.

- 86) 同書。p. 144
- 87) 同書。p. 144, p. 150。
- 88) ホセー1世(ナポレオン1世の兄)の在位(1808-1813), イサベル2世のフランス亡命=スペイン・ブルボン朝の崩壊=プリム暫定政権の成立(1868-71), サヴォワ公アマデーオ1世の在位(1871-3), スペイン第1共和制(1873年2月11日-1874年12月29日), 1874年のバビーア將軍のクーデタ=第1共和制の崩壊=アルフォンソ12世の在位(1874-85)=スペイン・ブルボン朝の復興。cf. ビーベス『スペイン』小林一宏訳, 岩波書店, 1987, pp. 162-182。
- 89) 斎藤孝『スペイン戦争』, 中公新書, 1988, pp. 4-5, p. 36。
- 90) Rémond, op. cit. p. 174.
- 91) ソペーニャ, 前掲書, p. 144。
- 92) Jacques Bainville, *Histoire de France*, Fayard, 1941, p. 491.
- 93) ibid., pp. 491-2.
- 94) Léon Daudet, *Vers le roi*, Grasset, 1934, p. 81.
- 95) Marie de Roux, *Le Statut national de la Maison de France*, in *Almanach de l'Action française* 1929, pp. 32-4.
- 96) ibid., pp. 36-8.
- 97) ibid., pp. 38-9.
- 98) シャンボール伯アンリ5世の死(1883年8月24日)から1932年までの間で, フランス王位請求筆頭者の系譜を記しておく。まず, パリ伯フィリップ7世(1894年9月8日死去。cf. Rémond, op. cit. p. 171)。次いで, オルレアン公フィリップ8世(1926年死去。cf. Marie de Roux, art. cit. p. 37.)。最後に, ギーズ公ジャン3世(1926年3月28日に王位請求者となる。cf. Marque, op. cit. p. 447)。
- 99) Rémond, op. cit. p. 147.
- 100) Jean-Paul Clébert, *Les Daudet 1840-1940*, Presses de la Renaissance 1988, p. 311.
- 101) ibid., p. 312.
- 102) Marque, op. cit. p. 282.
- 103) ibid., p. 284.
- 104) ibid., p. 290.
- 105) Weber, op. cit. pp. 75-81, pp. 444-450.
- 106) ibid., pp. 42-3.
- 107) ibid., p. 75.
- 108) Clébert, op. cit. pp. 81-2.
- 109) Léon Daudet, *Le Stupide XIXe siècle*, Nouvelle Librairie Nationale, 1922, p. 229.
- 110) Clébert, op. cit. p. 201.
- 111) ibid., pp. 224-5.
- 112) ibid., p. 236.
- 113) ibid., p. 248.
- 114) ibid., p. 313.
- 115) ibid., p. 313.
- 116) Daudet, *Le Stupide XIXe siècle*, p. 263.
- 117) Clébert, op. cit. pp. 365-6.
- 118) ibid., p. 337.
- 119) Weber, op. cit. p. 298.
- 120) これは, 《私》が《omnivalent》という造語を使ったことに対する《医者》の反応であると説明できな

- くはないが、それにしては余りにも唐突である。
- 121) André Breton, *Œuvres complètes I*, p. 948.
- 122) 『無原罪の懐胎』の中の5つの《simulation》(詐病)を扱ったテキスト(Breton, *ibid*, pp. 850–863)と『固定観念』の対話の冒頭近くで、《医者》が言った、《私は詐病をしている＝それらしい振りをしているのですよ、あなた》(p. 19)を参照。
- 123) Weber, *op. cit.* p. 65.
- 124) *ibid.* p. 298.
- 125) Léon Daudet, *Souvenirs*, Nouvelle Librairie Nationale, 1920, pp. 210–1.
- 126) Valéry, *PL.O.II.* p. 920.
- 127) Daudet, *Le Stupide XIXe siècle*, p. 268.
- 128) ミシェル・ビズンスキー「パリのアインシュタイン」(『アインシュタインと手押車』菅谷暁、高尾謙史訳、新評論、1989、p. 367)
- 129) Roudinesco, *op. cit.* p. 282.
- 130) Clébert, *op. cit.* pp. 418–9.
- 131) Daudet, *Vers le roi*, p. 28.
- 132) Roudinesco, *op. cit.* pp. 97–8.
- 133) Daudet, *Souvenirs*, p. 278.
- 134) Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, pp. 393–7.
- 135) Foucault, *Histoire de la sexualité I*, p. 73, p. 157.
- 136) Daudet, *Souvenirs*, p. 208.